

# スナイパーズ

キャネイド・エスケー 著

URI: <http://www.canadoh.jp/>

Email: [info@canadoh.jp](mailto:info@canadoh.jp)

## 目次

第一話	2
第二話	19
第三話	31
第四話	46
第五話	70
第六話	99

## 第一話

1

俺の名は、檜川ハガネ。暗殺を仕事とする十六歳だ。

なんで、たかだか十六の俺が暗殺なんてヤバイ仕事をしてるのか……というと、その原因は現代の世界状況と俺の親にある。

とにかく人々の抗争が激しい。秩序はわずかにあるような気がするけど、それも全体から見りゃちっぽけなものだ。おまけに失業者が溢れ、貧富の差が極限にまで広がっちゃまってる。闇の世界ではでかい殺し屋なんぞができて、毎日毎日誰かが殺し屋にやられてるし。世界人口の何パーセントずつ減ってんだか見当つかねえけど、いつか地球からいなくなるとはねーか？

この現状の原因は、世界各地で連発してる戦争だろうな。世界中の資源が減ってきてるもんだから、取り合う取り合うでもう減茶苦茶だぜ。日本はあの国に守られてるつつーでも、守られてる分、生命力吸い取られてる感じだしよ。日本の政治家連中からして、あの国を援助援助ってふざけてるぜ。高い徴税に苦しんでるのは表街道歩いてる国民だ

からな。上でぬくぬく生きてる連中や裏道歩いてる奴らにや、表の国民がいくら苦しんでも関係ねーんだろうよ。と言いつつ、わりーけど俺も裏のモンだ。実は俺の親が、殺し屋の元締めだったりするんだよな。何の因果でこんな家に生まれたんだか。生活には困らねーけど、十六の誕生日が来た途端「これからは、お前も仕事しろ」だもんな。こんなんで本当にいいのかよ、日本。

ところで、俺の住んでいる東京だけど、遙か昔は人々で賑わうスゲー良いところだったらしい。今から見たら、そんなのはおとぎ話にしか過ぎないけどな。

ついでだが、俺にはバンダナ集めっつー趣味がある。ガキのころからバンダナが好きで、もう数十枚は持つてるんだ。模様も色も千差万別。いくら集めても飽きねえコレクターアイテムだよ。知り合いには変わった趣味だって言われるけどな。うるせーよ。ほっといてくれ。

ま、そういうわけで、俺の額には大体いつもバンダナ巻いてあるんだ。なかなかいい特徴だろ？

「坊ちゃん。仕事ですぜ」

親父の部下のコジユウタが、俺の部屋の扉を開けてそう言った。コジユウタは親父の会社の幹部で、俺の育て役でもある。いつもグラサンをかけた、ガタイのいい野郎なんだ。歳はいくつになるんだったかな？ 三十代だったと思うけど。

「あー、ついにきたか」

俺は舌打ちした。実を言うと俺、まだ人の命を手にかけてたことがない。つまり、今回が初仕事だつてことだ。面倒くせえつたらありやしねえ。

「道具一式、揃えておきやした」

ドンッ、とコジュウタが机の上に置いたのは、殺し屋の六道具だ。昔々のそのまた大昔に存在してたつー〈忍者〉の〈忍び六つ具〉に基づいて、殺しに使える道具の中から六つ選りすぐられた物らしい。

「また一時間後に来やす。それまでに依頼書に目を通しておいてくたせえ」

そう言い残し、コジュウタの奴は部屋から出ていった。

俺は六道具の横にある依頼書に視線を落とした。

『山岸金融株式会社、社長山岸カズヤ 期限／西暦二九  
九八年 九月末日』

九月末日？ 三日しかねえじゃねーかよ。

心の中で御託を並べながら、俺は依頼内容を読み始めた。まじで、かつたりー。

2

バイクでひたすら走り続けた俺は、ようやく目標のいる大阪に到着した。もちろんお供なんていねえ。初っ端から

独りでやらなきゃなんねーらしい。失敗したら死ぬだろうな。

「げえ。東京より治安悪いんじゃないのかあ？」

大阪の街並みを見回し、俺は顎先から滴る汗を手の甲で乱暴に拭った。九月のこのくそ暑い日に、直射日光は相当堪えるぜ。ジーンズもTシャツも汗でびっしりだ。早いとこホテルに行つて涼みたいぜ。

俺はリュックから関西の地図本を取り出した。あらかじめ端を折っておいた大阪のページを開き、しげしげと眺める。

「えー山岸、山岸……つと。あつたあつた。ンじゃ、今日はこのホテルに泊まるかあ」

ぶつぶつと呟きながら（ハタから見たら変人だな）、ウエストバッグから携帯電話を取り出した。んで、ホテルの電話番号をかける。部屋は余裕で空いてたみたいで、すぐに一室予約できた。

「さてと。いくか」

バイクのアクセルをふかし、俺は今予約したホテルに向かい始めた。そこら辺に路上駐車の手がまくって、まともにも真つ直ぐ走れねえ。まあ、これはこれで楽しいからいいけどよ。

さーて、次の角を曲がれば——というところまで来る。

そこまではよかった。そこまではよかったのに、実際に角

を左折したとき、何かが俺の前に飛び出してきやがった。

「うわっ！」

驚いてハンドルを左にきり過ぎた。バイクの転倒と共に、俺の身体はアスファルトの上を転がった。くそー、いってえ……。

「大丈夫ですか!？」

不意に、女の子の声がした——かと思うと、俺の視界に一人の女の子が現れた。肩より少し長い茶髪に、黒い瞳の少女だ。俺より年下かな？ いや。案外同じ年かも。

「いてて」

身体のあちこちが痛むのを我慢して、俺はゆっくりと上半身を起こした。

「ごめんなさい。大丈夫ですか？」

俺のそばに膝をつき、女の子が心配そうな表情で俺を見ってくる。そうか。このコだな、飛び出してきたのは……。

「ほんとにごめんなさい。わ、わたし、追われてて……」  
追われてて？

俺が疑問に思うや否や、彼女の背後にガタイのでかいオヤジが現れた。いかにも「悪党」って面していやがる。

そいつはいきなり彼女の髪を掴んだかと思うと、かなりの力で上に引っ張った。彼女の口から、微かに悲鳴が漏れる。

「何しとんじゃ、小娘が！ お前は商品なんやぞ！ 商



目見ることになるぜ」

「黙れや小僧がつ。そんな脅しが通用すると思っとんのか!？」

……あー、畜生。もちつと賢いかと思つたのに……。

「しゃーねえ。望み通り痛い目見やがれ！」

素早く拳銃を抜き取り、俺はオヤジに銃口を向けた。思い切り引き金を引く——と。

——カチンツ——!

予想外の乾いた音が鳴り響いた。なんだこりや。

見ると、オヤジはまだ目をつぶって防御態勢を取つたま

まだ。右手は、彼女の髪から離れている。

よし。

「逃げるぞ」

彼女にそう言うや否や、俺はサツとバイクを起こし、彼女を後ろに乗せて走りだした。

「おいコラっ、待たんかあ！」

後ろからオヤジの怒鳴り声が聞こえる。ま、そんなモンは無視するに決まってるけどな。

3

バイクをホテルの裏側に隠し、俺は彼女を連れて予約しておいた部屋に入った。

さて。これからどうしようか？

絨毯の上に荷物を転がし、ベッドの上に腰を下ろす。

ふと、ソファのほうを見た。ソファには彼女が座っている——が、ずっと俯いたままで、俺と話をする雰囲気じゃない。

うー、気まずいな。

「あの……」

おっ？　ようやく顔を上げてくれたか。

「あの、ありがとうございます。助けてくれて……」

「いやあ、いいってことよ。あんな野郎に追いかけられたら、誰だって逃げたくなるさ」

彼女の緊張を緩めるつもりで、俺はわざと必要以上の明るさを出した。

「それより、キミ、なんて名前？」

「……笠岡……笠岡ミサです」

「笠岡さんか。俺は榎川ハガネ。よろしくな」

俺が軽い調子で言うと、笠岡は微かに笑みを浮かべた。

はにかんでるっていったほうが妥当なのかな？　——いや。けど、やっぱり少し違うか。どういう笑顔なんだろ？　これって。

「榎川さんって、関東のほうの人ですよね？」

いきなり、笠岡がそんな疑問を口にした。

「そうだよ」

「やっぱり。そうだと思います。話し方がこっちじゃないですから」

「そう言うキミも、関西弁じゃないよ」

突然、笠岡の表情が暗くなった。

な、なんだ？ 何かまずいこと言ったかな、俺？

「わたしは……関東の奴隷市場で買われましたから……」

「そ、そうなんだ。悪いこと聞いちゃったな。ごめんよ」

「いえ。いいんです」

まだ笠岡の表情は暗い。そんな表情で「いいんです」って言われても、全然いいって感じしねえぞ。

「優しいですね。樫川さん」

え？ 俺？

「わたしのこと気遣ってくれてるし、さっきの奴隷商人の人に銃を撃たなかったし……。今時、珍しい人ですよ  
ね？」

「そ、そうかな？」

はは……と、ひきつり笑いをする。

だってそうだろ？ あのオヤジを撃たなかったのは、銃に弾が入ってなかったからで、「撃たなかった」っていうより、むしろ「撃てなかった」ほうなんだからさ。

けど、おっかしいなー。確かに、弾は入れといたんだけどな——。俺の記憶違いか？

「今、何時だろ？」

眩き、俺は腕時計に視線を落とす。アナログ時計の針が、四時半を指している。

うーむ。ちよつと早いけど夕食にすっかな。——で、そのあと、山岸社長の家に張り込んだらいいか。

「なあ、笠岡さん。ちよつと早いけど、夕食にしない？もちろん、俺のおごりだよ」

俺の誘いに案の定、笠岡が困ったような申し訳ないような表情になった。

「けど……」

言いよどむ。

「俺と一緒に嫌？」

「い、いえっ。そうじゃないです」

笠岡が、慌てたふうに首を横に振った。

「じゃ、行こう」

頷く彼女を見、俺はにっこりと微笑んだ。

……それにしても、我ながらなんかクサイ台詞を吐いちまったな。

4

夕食を終え、俺は笠岡に「部屋、自由に使ってくれ」

と言い残し、リュックを背負って山岸社長宅へと向かった。

通りすがりのふりをして、豪邸の正門前を通り過ぎる。

正門に四人、中に六人以上、近くの建物には二人ずつ……か。結構嚴重じゃねーか、この警戒網。

さて、どーするかな？

コジユウタからもらった情報によると、確か警備にあたっているのはみんな裏暗殺団から雇った奴らで、互いのことはほとんど知らない——ってえことは、誰か一人とすり替わっても、バレる確率は低い。

なら、決まりだな。

俺は豪邸から一番離れて警備している男のところに行くと、気づかれないように背後からそっと近づいた。

今だっ！

俺の手刀を首筋に受け、男は呻き声を上げる間もなく、アスファルトの上に沈んだ。頸椎って、うまく打てば、気絶させるのに力いらねーんだ。おもしろいよな。

さ、今のうちに——と。まあ、こいつは縛って猿ぐつわはめて適当に隠しときやいいだろ。とにかく、今は変装だ。

「よし」

完璧なまでの変装をした自分を見、俺は思わず笑みをこぼした。そうだ、そうだ。忘れずに武器もとっておかなきゃな。

警備員服にライフルを背負った格好で、俺は近くのビルの屋上にのぼった。前着てた服は、ちゃんとリュックに入れてある。

さてと。あとはライフルに持参のスコープとサイレンサーを取りつけて、夜明けを待っただけだ。情報によると、社長は毎朝、早朝に一度だけ散歩に出るらしいからな。家から出た瞬間を狙って撃てば……。

わははは。チョロい仕事だぜ。

「おい、ボウズ」

「あん？」

背後からの声に、俺はうるさそうに振り返った。刹那、ライフルを背負った三〇くらいのオヤジが、どアップで目に映る。

『うおっ！』

思わず叫びそうになり、俺はあわてて言葉を飲み込んだ。

ふいー、焦ったぜ。

よく見りゃ、こいつ警備員服着てないな。同業者か？

「なんの用だ？ オヤジ」

さっきの一瞬の焦りを悟られないように、落ち着いた口調で訊ねる。

オヤジの口元に、不敵な笑みが浮かんだ。

「ボウズ。素人だな」

——どういう意味だ？

「みんな知ってるぞ。お前さんみてえな素人に、山岸社長は殺せねえよ」

「な……まさか……」

「バレてんぞ」

オヤジの台詞を聞くや否や、俺はライフルを思いきり振り、ストックで奴の顔面を狙った。

余裕でかわすオヤジ。しかも、そのままストックを掴まれちまった。

くそつ。なんて野郎だ。

「あきらめな、ボウズ」

顔面に笑みを張りつけたまま、物凄い力でストックを引っ張る。

抵抗したんだけどなあ……取られたよ。

「んならっ」

俺は袖口から隠しナイフをサツと取り出し、勢いよく横に振った。

「やめろって——」

ナイフを避けるオヤジの顔から、一瞬にして笑みが消える。

「言ってるんだろ！」

奴の拳が、俺の鳩尾に食い込んだ。

とてつもなく痛え。俺は腹を抱えて地面にうずくまった。

「ヘタなあがきをするな。誰も、おめえさんに仕掛けないだろう？ 戦う気なんかねえんだからよ」

涙の滲む目で、俺はオヤジを見上げた。

確かに……戦う気はなさそうだ。

オヤジは俺のそばにしゃがみ込むと、哀れみを含んでその視線を俺に向けた。ヤな視線だぜ。

「すまねえな。大丈夫か？」

そう言い、俺の背に手を当ててくる。

「加減はしたんだがな。そこは痛いよな」

『なら、すんなっ』

怒鳴ってやろうとしたが、うまく声が出ねえ。

「なあ、ボウズ」

あん？

「おまえさん、なんで狙撃手なんかやってんだ？」

「かはっ……てめえになんざ……関係ねーよ」

やっと声が出た。これで、ちゃんと応対できるぞ。

オヤジがぴくっと右の眉を上げた。

「確かに、関係ねえよなあ。だがな、ボウズ。これだけは言わせてもらいてえ。狙撃手なんぞやってても、いいことなんかねえぞ。俺にはわかるんだ。おまえさんは、人を殺せねえ。そう言う運命にあるんだよ」

オヤジの表情は真剣だ。けど、狙撃手やってる奴にそんなこと言われても、全然説得力ねえよ。

それに、なんだ。運命だと？ てめえは、あぶねー宗教の信者かっ？

「そんな運命、あるわけねえだろっ」

背に置かれた手を払いのけ、俺はゆっくり立ち上がった。

続いて、オヤジも立ち上がる。

「代わりに殺つてやろうか？」

突然の申し出に、俺は驚いて奴の顔を見上げた。

「おまえさんじゃ力不足だ。俺が代わりに社長を殺つてやろう」

「な、なんで、てめえなんかに代わられなきゃ……」

「好感もったんだよ、ボウズにな」

ニカッ、と笑ったかと思うと、奴は背のライフルを背負いなおし、俺に背を向けた。

そしてそのまま、扉に向かい歩き出す。

「おいっ。ちよつと待てよ！」

慌てて呼び止めようとしたが、奴は振り返ることなく、扉の向こうに姿を消した。

5

結局、あの後俺はホテルに戻った。すると笠岡の姿はどこにもなく、絨毯の上に俺の荷物が転がっているだけだった。

そして次の日、ニュースの中に『山岸社長暗殺事件』があった。あのオヤジの仕業だ。手が早すぎるぜ、オヤジッ。

「ありがとうございます」

バーガーショップで昼飯を済ませ、俺はまっすぐにバイ

クへと向かった。

スタンドを倒し、バイクに跨る——と、その時だ。

「どこ行くんですか、樫川さん？」

聞き覚えのある女の声でした。

この声は——。

振り向いた俺の目に、あの笠岡ミサの姿が映った。

「どこ行ってたんだよ？」

訊ねる俺に、彼女は微笑み返してくるだけだ。

なんか、昨日とはえらく雰囲気が違うぞ。

「ホントは、ばらしちゃいけないんだけど、特別に教えてあげる。あたしね、あなたの暗殺を依頼されてるの」

なっ……

「昨日、あなたの前に飛び出したのもワザと。あなたに近づくためにしたのよ」

「そんな馬鹿なこと……」

「あるのよねー。けど、わたしは気まぐれなの。ずっと後はついて行くけど、まだ仕事をする気はないから。ま、くれぐれも気をつけてね」

彼女がそう言ったとき、彼女と俺のあいだに一台の外車が割り込んできた。

運転してる奴、あれ、昨日の奴隷商人だ！

「じゃあね」

軽く俺に手を振り、笠岡は車に乗り込んだ。

スナイパーズ

ゆっくりと車が動き出す。一分も経たずに、車は俺の視界から消えた。

「……」

賑わう通りで、俺はその後も呆然とその場にたたずんでいた。

## 第二話

1

俺の名は、檜川ハガネ。暗殺を仕事とする十六歳だ……  
て、前に言ったっけ？

実はこの俺、暗殺者やってんのに同業者に命を狙われている。しかもその同業者ってのが、俺と同じ年くらいの娘だ。やられちまったら情けねーよな。

誰かが扉をノックした。

「坊ちゃん。仕事来てますぜ」

コジユウタの声だ。

「入っていいぞ」

俺がそう言うや否や、コジユウタが扉を開けて入ってきた。手に紙の束を持っている。たぶん、仕事の依頼書だな。

「これだけ依頼来てやす」

机の上に、依頼所の束がドサツと置かれた。

ほらな。やっぱ思った通りだ。

……にしても、やけに多いな。こんだけの依頼、一体どんな奴らがするんだろ？

「初仕事の出来が良ければ良いほど、仕事の量は多くな

りやす。坊ちゃんの初仕事も素晴らしいモンでした」  
まるで自分の話でもするかのように、得意げに話すコジユウタ。

俺としては、その話はしないで欲しい。あの仕事をしたのは、結局あの謎のオヤジであって俺ではないんだ。殺しのエキスパートがすりや、どんな依頼でも見事に成功させるさ。

「どれから済ましやすか？」

訊ねるコジユウタに、俺は返答に迷った。

「どれって訊かれてもなあ……。こーゆー場合、一番上からやっていくのが普通じゃねーのか？」

呟きつつ、俺は一番上の依頼書を手に取った。

『横浜市ジャネスト教会 ラルフ・セドレッド神父 期

限・西暦二九九八年十一月二日』

ジャネストの神父う？ なんか嫌な予感がするぜ。

ジャネスト教って言や、確か俺が生まれた頃にできた宗教じゃねーか。そんなトコの神父に関わったりしたら、絶対ロクなことになんねーよ。

「はあ〜」

依頼書を手に持ったまま、俺は深々とため息を吐いた。

「聞こか」

エンジン音を鳴り響かせながら、俺はジャネスト教会の門の前にバイクを止めた。

それにしても、でっかい建モンだな。外壁もすげーや。これじゃ上からの進入は無理だな。

「しゃーねえ。正面から堂々と入ってやるか」

ジャケットの内側に地図と拳銃の存在を確かめ、俺はエンジンンを切るとバイクから降りた。

ふと、腕時計に目をやる。

(pm. 11:35)

うん。丁度いい時間だ。これなら教会の奴らもグツスリだろう。

ンじゃ、行動開始だ。俺は入り口に防犯カメラがないかどうか確かめると、でっかい扉に少しずつ力を加えていった。

「お、えらい。ちゃんと鍵開いてるじゃん」

ひとりほくそ笑み、俺はさらに力を込めた。

扉がゆっくりと開く。

「げっ。ウソ！」

驚きのあまり、俺は思わず間抜けな声を出した。

だつてよお。扉の向こうから光が漏れてきたんだぜ。予想外だよ。

「なんだよ。ここは二四時間営業のコンビニかよ？」  
悪態吐き、俺は扉を閉めようとした――が、

「何か用ですか？」

突然の背後からの声に、飛び上がらんばかりに驚いた。  
恐る恐る振り返る。俺の後ろに……神官がいた。

3

「いやあ、はっはっは。すいませんね。こんな夜分遅く  
に」

神官の後をついて歩きながら、俺はひきつり笑いを浮か  
べた。

「いいんですよ。せっかく神父様を訪ねていらした方を、  
そのまま帰すわけにはまいりませんから」

愛想のいい笑いを顔に張り付け、神官が言う。

ちくしょー。帰せ、このヤロー！ って、心の中で怒鳴っ  
ても意味ないよな。

「さ、ここです」

ふと、一つの扉の前で神官が立ち止まった。俺が立ち止  
まるのを見てから、扉をノックする。

「セドレッド神父。面会人が来ております」

『どうぞ』

中からの即答を聞くと、神官はその扉を静かに開けた。

「うおっ」

扉の向こうを見た瞬間、またもや俺は間抜けな声を出した。

だってよお、いきなり金の像が見えたんだぜ。しかも等身大の……。これで驚くなって言うほうが無理つてもんだ。

「どうぞ、お入り下さい」

人のよさそうな声に、俺は視線を像から少し下におろした。

白い口髭を生やした人の良さそうな男が、これまた立派な椅子に座っている。

「はは。失礼します」

苦笑いを浮かべ俺が書斎に入ると、後ろで扉の閉まる音がした。神官が閉めたのかな？

「何のご用ですか？」

俺をまっすぐと見ながら、神父のヤツが言った。

くそー。いきなり、そんな質問すんなよなあ！ 困るじゃ

ねえか！

あー、畜生！ 暗殺しに来ました、って言ってやろうか？

「どうしました？」

「あ……いえ。ちよっと、ジャネストの教えを乞いに…

…」

「ほう」

ああ、もう！ あからさまに怪しいじゃねーかよ！ 誰

が、こんな夜中に礼拝に来るんだよつ？ ふざけてんのか、俺!?

「わざわざ教えを受けにいらしたのですか。それはそれは……むげに帰すわけには参りませんねえ」

ん？　なんか、神父の目つきが変わったような――。

――ガッ――

突然、俺の首筋に強烈な衝撃が走った。

意識がもうろうとする。

床に倒れざま、俺は神父が不気味に笑うのを目にした。

4

冷たい感触に、俺は目を覚ました。

どこだ、ここ……。それに、なんか吊りさげられてるよ  
うな感じがする。

ん？　誰だ？　俺の前にいるの。――三人？　こいつら  
は！

「あぁっ。てめー!!」

俺が大声で叫ぶと、目の前にいる野郎がにっこりと笑い  
やがった。

そう。こいつは、あのラルフ・セドレッド神父野郎だ！

「くそっ、このヤロオ！」

言葉を吐き捨て、ヤツを殴るために身体を大きく動かそ

うとして、俺は気づいた。俺の手足に枷がはめられ、壁に磔にされてることを——！

「気分はどうだね？」

「へっ。最悪だね」

「……ふん。正直だな、きみは」

俺の虚勢を張らない応対に、神父のヤローはつまらなさそうな顔をしている。

へっ！ ザマーミロ。

ついでに嘲笑もしてやりたいけど、今の俺はそれどころじゃねえ。

「なんでわかった？」

声のトーンを少し下げ、俺は神父に訊ねた。

神父の顔に笑みが戻って来る。

「昨日、報告があったのだよ。暗殺者がくる、と……だが、正直言って、きみのような子供が来るとは思いもしなかった。まったく、意表を突かれたよ。だから、最初は気づいてなかったのだ。きみのおかしな台詞を聞くまでは、確信も持てなかった」

やっぱ、あの台詞のせいか。

「暗殺者くん。私はね、きみのような子供を減らすためにこの教会をつくり、今まで活動してきたのだよ。だから、私の命を狙うなどというような馬鹿なマネはしちゃいけないんだ。誰が依頼したのかは知らんがね」

そこまで言ったとき、ラルフの目が細くなった。  
なんだ？

「殺れ」

なにいいい！ どうしてそうなるんだっ？ さっきまでの  
善人セリフはどうしたんだ！？

おいこら！ こつちに銃口向けんじゃねえよつ。おまえ  
だ、おまえ！ ラルフの横の神官 a。

ああつ。指に力入れるな！ 引き金を引くなあー！

「ぐあつ」

「？」

首から血を吹き出させて倒れる神官に、俺は自分の目を  
疑った。

よく見ると、首にスローイングナイフが刺さってる。いつ  
たい誰が……。

「がっ」

そうこう言ってるうちに、もう一人の神官らしき男も、  
さっきのヤツと同じ所を刺されて床に崩れた。

残る一人になった神父といえ、情けない顔をして狼狽  
している。

へへ。ザマーミロ！

「祈りなさい。今日はあなたの命日よ」

突然、女の声が聞こえたかと思うと、俺と神父の間に少  
女が現れた。

そのコは右手に持ったナイフを目にも止まらぬ早さで突き出すと、深々と神父の喉に刺した。

こ、このコは——！！

「笠岡！」

俺は思わず叫んだ。

こいつらを殺つたのは、あの笠岡ミサだったんだ！

「危ないところだったね」

微笑を浮かべ、笠岡が近づいてくる。どこからともなく針金を取り出したと思うと、俺の手足の枷を一つずつはずしてくれた。

「なんで、きみがこんな所に……」

赤くなっている手首をさすりつつ俺が訊ねると、笠岡はおもむろに右手の人差し指を上に向けた。俺も上を見る。

……あ、通気口だ。

「わたし、あなたの暗殺者でしょ？ だから、ちゃんと後をつけてたのよ」

「は……はは。そうなんだ……」

ひきつり笑いをしながら、俺はゆっくりと彼女の前から移動し出した。

さっさと逃げたほうが良さそうだな。

「ちょっと。どこ行くの、樫川さん？」

「いや。どっつてコトもないんだけど……ちよつとね」

「もしかして、逃げる気？」

「い、いやあ。はっはっは」  
うわっ。バレバレだ。

「ふうん。命の恩人を放って、一人で帰る気なんだ？  
けど、逃げてでも無駄よ」

え？

「まだ言ってなかった？ わたしの暗殺成功率は百パー  
セントなのよ」

いいっ？

「世界中のどこに行こうがどこに隠れようが、わたしが  
殺そうと思う者は、必ず死ぬ運命にあるのよ。そこまで分  
かっても逃げるの？」

「い、いえ」

ドモる俺を目笑すると、笠岡は突然上を見上げ、通気口  
に向かいナイフを投げた。

『あがっ』

え。あが？ 誰の声だ？

通気口を見上げる俺の顔に、何かの液体が落ちてきた。

手で拭いてみる。

「うお！」

手にねっとりついた赤い液体に、俺は思わず声を上げ  
た。

血だよ、これ。血。

あわてて後ろに飛び退く。その場所が、丁度いい角度だっ

たらしい。通気口の口に、人の頭らしき物が見えた。

「他の団の暗殺者よ。わたしが気づいてないと思っ  
たのかしら」

上に向かってそう言い、笠岡は俺の顔を見た。

「それにしても、一体誰の恨みを買ったの？ 尋常じゃ  
ないわよ、この雇い様」

「え？ もしかして上の奴、俺を狙ってたの？」

俺のこの台詞を聞いてか、笠岡が大きなため息をついた。

「何っにもわかってないのね。樫川さん」

あきれた表情で、俺の顔を見つめる。

そんなこと言われてもよお。俺にどーやってわかって  
んだよ？ 恨みを買った覚えもないのに……。

「ま、いいわ」

諦めたように、笠岡がしゃべり出す。

「とにかく、ここから出ましょ。安全なところへ行った  
ほうがいい」

「けど、どこから出るんだ？ 通気口から？」

俺の質問に、笠岡は横に首を振った。

「ドアから出ましょ。今は、上のほうが危ないから」

俺が理由を訊ねる前に、笠岡は早足で扉のところまで行  
き、振り返った。

「なにしてるの？ 早くっ」

「あ、ああ」

スナイパーズ

促され、俺はわけもわからぬまま、笠岡の後を追った。

## 第三話

1

「がっ」

咄嗟に目を瞑った俺の耳に、野郎の息とも声ともつかねえ音が聞こえてきた。なんか最近パターン化してきてるから、何が起こったのか大体見当つくけどよ。

目を開ける。思った通りだ。俺の前に笠岡の姿が見えた。クリーム色のスーツ・コートを着てる。その右手には、べつとり血のついたナイフが握られてた。そして足元には、血溜まりに沈んだ背広男の後ろ姿……。これで何回目だ？ 笠岡に命を助けられたのは。

ふと、笠岡がその場にしゃがみ込んだ。と思ったら、死んだ男の服でナイフの血を拭ってるみたいだ。なんか、いろんな意味で侮れねえよな、笠岡って。

俺は周囲を見回した。鉄製の梯子やらクレーンやら……。そんなのが混在してるきたねえ倉庫の中には、生きてる人間は俺と笠岡しかいない。あつという間に七人が殺されたのか。いつもながら凄ええよな。銃器を使わず、この殺傷率。まさに一流の殺し屋だよ、笠岡は。おかげで、闇取引をぶっ

潰すつー依頼は遂行できたわけだ。

笠岡が立ち上がり、俺のほうに顔を向けた。ちよつと厳しい目つきをしてる。怒ってるのか？

「あなたは隙があり過ぎなのよ、檜川さん」  
う。

いきなりきつい言葉が飛んできやがった。そりゃー、確かに俺は隙だらけかもしれないけど……まだ気配とかよくわかんねーんだよ。しかたねえだろ？

「まだ駆け出しだから隙があってもしかたがない、なんて思ってるんでしょね？ この業界は一つのミスが命取りなのよ。一度失敗したら、それで終わるんだから。次こそは、なんて思ってたら生き残れないの。わかってる？」  
うぐ。

すげえ。なんて洞察力だ。俺の心を完全に見透かしてる。言ってることは道理になってるし。

「あなたはわたしの獲物なんだから、自分の身くらい自分で守れるようになってもらわないと……」

「わ、わかってるよ」  
って、なんだか腑に落ちない言い分だな。

笠岡が溜め息をつく。俺は前々から気になってたことを口に出した。

「なあ、笠岡。なんで俺のこと助けてくれるんだ？」  
意表をついたのかわかんねーけど、笠岡が一瞬目を丸く

した。俺から目を逸らす。

「他の人に殺されたんじゃ、わたしの手柄がなくなるでしよ。それだけよ」

「でも笠岡、全然俺を殺す気配しねえよな」

言って、俺は息を呑んだ。笠岡の殺気に満ちた眼差しに、身が一瞬で強張った。

「自惚れないで。わたしにとつたら、あなたを殺すなんて造作もないことなのよ」

冷やかな声だ。すっげー怖え。

「まあ、まだその気しないから殺さないけどね」

笠岡から殺気が消え、いつもの雰囲気に戻る。

初めて味わったぜ、さっきの心地。なんつー怖さだよ。

それにしても、殺す気しないからまだ殺さないなんて、

こつちにとつたら生殺し状態だよな。でも不思議と、笠岡に殺される気しねえんだよなあ。

「それじゃ、この血生臭いところから退散しましょう」

笠岡が言う。

俺はもう一度辺りを見回し、一言「ああ」と答えた。よ

く考えりゃ、こんな死体転がってる真ん中で話すなんて、気分がいいもんじゃねえよなあ。

俺は傘持ってねえんだよ！

全く何なんだよ。大雨降るなんて聞いてねえぞ。これじゃあ危なくてバイク転がせねーじゃん。さっさと東京に帰ってーのに、このままじゃ今日は泊まる羽目になるぞ。隣の県だから帰れそうな気もするけど……。そういえば、笠岡はどうするんだ？

俺は向かい席に座ってる笠岡に目をやった。笠岡は頬杖をつき、ガラスの向こうを見つめてる。その斜め向いた顔は、ほのかに笑ってる感じだ。

「雨好き？」

俺の質問に、「え？」と笠岡がこっちに向き直った。

「なんで？」って目が訊いてる。

「いや、嬉しそうにしてるからさ。雨好きなのかなー、って」

「別に嬉しそうにしてるつもりはないけど……嫌いじゃないよ」

平然とした表情で、笠岡がホット・ティーを飲んだ。

俺達は今、繁華街の喫茶店にいる。バイクで移動してたら突然雨降ってきやがってさ。しかたなく近くの茶店に避難したんだ。雨はやむ気配するどころか、より一層強まる勢いだぜ。

店内を見回す。店の中には、俺達以外にも数人の客——男女2組と背広のオヤジが一人いた。広くないしこざっぱ

りとした造りの店だけど、こういうところに入ってるのは割合裕福な奴らだけなんだよな。もう午後の6時過ぎてるから、あと1時間くらいもしねーうちにみんな帰るんだろうけど。

重苦しい溜め息をこぼし、俺もホット・ティーを飲む。冬はやっぱホットだよな。

ンなことしみじみ思っていると、笠岡と目が合った。うっ、なんか目え逸らしづらいぞ。

「どうしたの？」

視線を逸らせず硬直してる俺に、笠岡が訊いてきた。や、やっど変化が訪れた……。

「いや、別に……。それより笠岡、これからどうするんだ？」

訊ね返す。

少し悩む仕草を見せ、笠岡が答えた。

「本当は一度会社に戻らなきゃいけないんだけど。檜川さんが帰らないんだったら、見張ってようかな」

え。

「見張り？」

「そう。見張り」

口元に微笑をたたえたまま答える笠岡。見張ってるってことは、つまり一緒にいるってことか。いや、もしかして離れたところから見張ってるのか？ それだったら、なん

か無性に悲しいぜ。

とりあえず訊いてみるか。

「俺、これからホテルに行くつもりだけど、笠岡も泊まる？」

笠岡の目が微妙に丸くなった。

あ、やべ。

「もちろん、違う部屋に」

付け足す。やべー、やべー。あのままだったら、まるで下心あるみてえじゃねーか。

「そ、そうね。そうしようかな」

笠岡がぎこちない笑顔をしてる。うう、釣られてこつちまでぎこちなくなっちゃまった。

言葉足らずは恐えな。はは……。

苦笑しながらガラス窓のほうを見、俺はまたしても動きを止めた。路地裏に無理矢理連れ込まれようとしてる女の子が、偶然にも目の端に映ったんだ。これは……やっぱり助けに行くべきか？ 人として。

俺の様子を妙に思ったのか、笠岡が俺の視線の先を追った。

俺は席を立った。黒いエアテック・ジャケットを着る。

「ちよっと行ってくる」

「待って」

うお、即行で呼び止められた。

少し眉をひそめている笠岡が目映る。

「助けに行くつもり？」

「ああ」

俺は頷いた。

「見えちまったのに放っておくと寝覚め悪いからさ。

ちよつと助けてくるよ」

「路地裏に何人待ちかまえてるかわからないわよ？

『ちよつと』で助けられると思う？」

「意表をつけば、一人助けるくらいできるよ」

「今日もターゲットに囲まれてたあなたが？」

う。

「だ、だけど、見捨てたらかわいそうじゃん」

思わずどもる。なんつー情けねえ声音なんだ、俺。

笠岡が嘆息した。

「まあ、そこが檜川さんのいいところなんだけど、ちよつ

と無謀よね」

う。今、ぐさつと心になんか刺さったぜ。

しかし、早く行かねえと。助けられるもんも助けられな

くなっちまうぞ。

「とにかく俺、行ってくるよ」

「わたしも行く」

笠岡が立ち上がる。おおっ、すげー頼もしいぜ——って、

やっぱ情けねえ、俺……。

俺の出る幕はなかった。か、悲しすぎる。

俺達は女の子が連れ込まれた路地裏に行き、物陰から人数を確認したあと、慎重に行動を……って思ってるうちに笠岡がスローイング・ナイフを投げた。投げたのはたった二本。そして対象も二人。ナイフは百発百中で喉に刺さって、女を襲ってた野郎二人は絶命した。

「何も、殺す必要はなかったんじゃないか？」

横から笠岡に話しかける。こっちに振り向かずに、笠岡が答えた。

「この天気とこの地形と持つてる道具と所要時間を考えて、こうする意外に方法があったと思う？　ヘタに生かしておいたら仕返しだって考えられるでしょ」

「ごもつとも。正論だ。でも、なんか気分的にちよつとなあ……。」

俺は前方を見た。着衣を乱された女が、開きっぱなしの傘と並んで地べたに座り込んでる。さずかしシヨックだったんだろうな。当たり前か。

「大丈夫？」

女の子に歩み寄り、傘を拾ってから声をかける。見た感じ、俺よりちよい年上かそこらか。

一瞬置いて、彼女が涙に濡れた目で見上げてきた。なん  
か俺にまでおびえてる気がするんだけど、気のせいかな？

とにかく笑顔だ、笑顔。

「大変な目に遭ったね。早くここから去ったほうがいい  
よ。立てる？」

身を屈めて手を差し伸べつつ言う。刹那、ようやく我に  
返ったのか、女の子が大声で泣きついてきた。おかげで俺  
は身動きとれねえ。左手に傘持つてるし。

うー、ここから早く立ち去らないと、さすがにやばいな。  
な。

「な、なあ」

「また襲われたくないなら、泣いてないで立ち上がりな  
さこ」

厳しい一言が上から飛んでくる。笠岡だ。

顔を上げると、スローイング・ナイフを革の鞘にしまっ  
てる笠岡がすぐそばにいた。コートの内側にそのナイフを  
納めてる。多分コートの裏にいっぱいあるんだろうな、ナ  
イフ。

それにしても寒いな。寒気の中ずぶ濡れでいるのはこた  
えるぜ。このままじゃ笠岡も俺も風邪ひいちゃうよ。

笠岡の脅しが効いたらしい。震えながらも女の子が立ち  
上がった。俺が支えつつだけだ。

「これ」

俺は傘を差し出した。

「ありがとうございます」

そう言っつて、女の子が傘を受け取った。もう大丈夫かな？

「じゃあ、俺達行くけど……。さっさと家に帰りなよ？」

「はい。ありがとうございます」

俺は頷いて答え、女の子から離れようとした。が、

「あ。あの……」

女の子の声に踏みとどまった。

なんだ？

「よろしければ、うちにいらつしやいませんか？ 何か

お礼をしたいのです」

お礼か。ずぶ濡れだし、どのみち今日は家に帰れねえし、行ってもいいかなあ。

笠岡の意見も聞かなきゃな。と、笠岡を見ると、首を横に振られた。駄目か。

「ありがたいけど遠慮しておくよ」

「で、でも……」

引き留められそうな雰囲気だ。

「わたし達これから用事があるの」

笠岡が女の子の言葉を遮った。

「それにこのご時世、助けてもらったからって簡単に家に招き入れるのは危険よ。善意が悪意の裏返し、なんてことはありふれてるんだから」

笠岡から咎められ、女の子はすっかり恐縮しちまつてる。笠岡の言うことは正しいけど、他にも言い方があるんじゃないかなあ？

「そこまで言わなくても……」

俺が口を挟むと、じろりと笠岡の睨みが飛んできた。

「この人が今後生きていく上で大切なことよ。曖昧に言ったら意味ないでしょ」

「そりやそうだけど。もうちょっと優しく言うとかできるんじゃない？ せっかく好意で家に誘ってくれたのにさ」

笠岡が目を細めた。

「なら好きにしたら？」

いきなりそう言うや、俺に背を向けて歩き出す。

あれ？ 俺、そんなに怒らせちまうようなこと言ったのか？

「じゃ、じゃあ気をつけて帰りなよ」

女の子にそう言い残し、俺はすぐに駆け出した。追いついても、笠岡は振り返りもせずにはスタスタ歩いている。

「笠岡」

呼びかけると、笠岡が立ち止まった。俺のほうに振り向く。その顔は無表情だ。

「榎川さん。あなたがどういう世界に生きてるかわかってる？」

え。どういいう世界って……。

「あなたもわたしも、さっきの人とは違う世界に住んでるのよ。血塗られた裏社会。いつも危険にさらされてる……そんなわたし達が、ああいう表の汚れ少ない世界を歩んでる人と行動を共にしたら、あの人まで余計な危険に遭うかもしれないのよ」

淡々と喋ってる笠岡。

どう返していいかわからずにいた俺の口から出たのは、

「ごめん」

っていう一言だった。

笠岡が目を逸らした——かと思うと、口元に手を当てて小さくくしゃみした。このとき俺は今さら、自分達がずぶ濡れだっことを思い出した。

「ご、ごめん！ 早くホテル行こう！」

言って、辺りをきよろきよろと見回す。あつた、ホテル！

なんかボロいけど、この際選んでられねえ。

笠岡の手を掴み、俺は走り出した。どうか、部屋空いてますように！

4

ずぶ濡れのガキンちよが二人でホテル泊まり。なんとか部屋を借りられたものの、フロントの人にすっぱー怪しまれた。まあ、しかたねえよな。怪しいもんな。笠岡が機転

を利かして対応してくれなかったら、部屋借りられなかったかもしれねえ。

浴衣姿でベッドに腰掛け、俺は鼻のため息をついた。ずぶ濡れだった服は、絞ってからハンガーにかけて吊してある。多分明日までに乾くだろ。

……笠岡、そろそろ風呂から上がったかな？

時計を見ると八時十五分ごろだった。部屋に入ってから、まだ三十分くらいしか経ってねえな。女の子って、どれくらいの時間風呂に入ってるんだろう？ 内線かけたらまずいかな？ 三コールくらいで切れば問題ないか。

俺は、部屋に備え付けられてる電話の受話器を手にとった。内線番号をプッシュする。二、三秒間をおき、呼び出し音が鳴り始めた。

一回、二回、三回……切るか。

受話器を電話に戻し、俺はベッドの上に自分の体を放り投げた。ひんやりとした掛け布団に、俺の体温が奪われる。うおー、さみー。

うだうだやっていると、なんだか眠くなってきた。寝ちまおっかなあ。

と、その時、電話の呼び鈴が鳴り出した。笠岡かな？

「はい」

起き上がって電話に出る。受話器越しに予想通りの声が聞こえてきた。

『もしもし、榎川さん？ さっき電話した？』

聞こえてたのか。わざわざかけ直してくれたんだな。よく俺だってわかったなあ。って、笠岡に t e l するのなんてここじゃ俺くらいだし、わかって当然か。

「ああ、したよ」

『どうしたの？』

「あ、いや……」

別に用事はねえんだけど。

「風邪ひいてねえかな、と思って……」

とってつけたような言い訳っぽいよな、なんとなく。実際とってつけてるけどさ。風邪ひいてねえか心配なのは本音だぞ。

くすつ、と笠岡の小さく笑う声が聞こえた。

『ありがとう、大丈夫よ』

「そっか。ならいいんだ」

う……。こ、このあとに続ける会話が思い浮かばねえ。

ここはもう切るしかねえか。

「んじゃあ——」

『ねえ、榎川さん』

切ろうとしたら、笠岡が話しかけてきた。なんだ？

「ん？」

俺は訊く態勢になった。けど、一向に笠岡が喋ってこねえ。どうしたんだ？

『……うん。ごめん。なんでもない』  
え。ンな、何か絶対ありそうな声で何もないって言われ  
ても、気になるじゃねーか。

『疲れたから、もう寝るね』

「え」

一瞬戸惑い、俺は「ああ」と答えた。

『おやすみなさい』

「うん、おやすみ」

会話を終え、受話器を置く。また静かな空間に戻った。

なんだったんだろ？ 笠岡の様子、なんか今一瞬いつも

と違う感じがしたぞ。何を言おうとしたんだろう？

「ふあ……」

あくびが出た。なんだかんだで疲れてるんだな、俺も。

特にすることねえし。時間的にかなり早いけど、もう寝よ  
うかな。よし、そうしよう。

掛け布団と毛布を捲り、俺は素早く布団に潜り込もう―

―として、歯を磨いてないことを思い出した。くー、めん  
どくせえ。でも磨かねえとなあ。

怠い体を引きずり、俺は洗面台へと向かった。こんなと  
きは、自動歯磨き装置があればいいと思うよな。売ってる  
らしいけど、使ったことねえんだよな―。

まあいいや。早いとこ歯磨いて、とっとと寝ちまおう。

明日の午前中には東京に帰らねえとな。

## 第四話

1

雨だ。久しぶりだなあ。三月に入ってから何回目だ？  
まあ、どうでもいいけどよ。

雨降ったあとつて、冷えるんだよなー。今夜はヒーター  
つけて寝ようかな。うん、そうしよう。

にしても……

「暇だー！」

俺は叫び、ベッドから跳ね起きた。

「朝からごろごろごろごろごろごろごろ！ 部屋の  
虫になるまであと一歩だぜ。親父のやつ。今日は外に出ちゃ  
いけねーつて、いったい何なんだよ、いきなりっ」

獣みたいに吠えながら、頭を抱えてのたうち回る。もう、  
そうしなきゃやつてらんねーんだよ。今の俺は。

だって、朝からずっと自室に押し込められてんだぜ？

コジユウタが言うには、「社長（俺の親父だ）から、坊ちゃ  
んを部屋から出さないように、と言いつけられまして……」  
だどよ。何なんだよなー、まったく。

「ふう」

一通り怒鳴り終え、俺は再びベッドに突っ伏した。ごろごろと、ベッドの上を転がる。

「なんか、面白えことないかなあ……。コジユウタの奴も顔出さねえし。誰でもいいから、ちよっかい出してくんねえかな」

ンなことを愚痴ってる時だ。机の上に放り出してあるケータイが鳴り出した。

起きるのも面倒くせーけど、とりあえずケータイを手に取る。

「もしもし？」

訊くと、ケータイの向こうからめちやくちや明るい声が聞こえてきた。驚いたよ、マジで。いったいどこで、俺のケータイナンバー知ったんだ？

『もしもし、榎川さん？ 暇そうねー。元気？ わたしが誰だかわかる？』

立て続けに訊いてくるこの声は……。間違いねーよ。あのコだ。

「笠岡だろ？」

『当たり前ー。よくわかったね。さすが榎川さん』

ケータイの向こうで、笠岡のやつ、えらく嬉しそうだ。

「どこで俺のナンバー知ったんだよ？ それに、不用心だぜ。お前のナンバーもわかつちまうんだぞ」

『大丈夫よ。公衆電話からかけてるもの』

あーそうかい。

「ンなことより、何の用だよ。俺を殺す気にでもなったのか？」

『……』

あれ？ 返事がない。

ま、まさか……！

「お、おいっ。笠岡。マジなのか？」

『……』

うそだろお。

『依頼人がね』

「え？」

『依頼人がね、まだなのか、って急かすらしいのよ。それで、あの人も怒っちゃって……。わたし、あの人には逆らえないから』

あの人？ 笠岡の上司のことかな。

「じゃ、じゃあ——」

今から殺しに来るのか？——という台詞の前に、笠岡が割り込んできた。

『あなたがそこにいる限り、わたしは手が出せないから。安心して』

その時、ケータイの向こうで、息を呑む音がした。

「おい、どうした」

『ごめん、榎川さん。あとで電話する』

「あ、おいつ」

受話器の置かれる音がする。

その直前、確かに聞こえた。聞き間違いじゃない。あれは、銃声だ。

ケータイから「ツー、ツー」という電子音が鳴っている。俺はボタンを押してその音を消し、ケータイを持ったまま、でかい窓ガラスに張りついた。俺のいる部屋はビル（表向きは、一応コンピューター会社だ）の二〇階にあるんだ。近くで起こったことなら、ここから見えるはず。

目を凝らして、地上を見回した。見つからねえ。近くじゃないのか？ でも、あいつは俺の暗殺者なんだ。いつもそばにいるって、あいつが言ったんじゃないか。

「畜生。ここからじゃ見えねえのか？」

毒づき、俺は部屋を飛び出した。上から見えねえんだったら、下に行つて捜せばいいんだよ。

エレベーターに乗り、一階のボタンを押す。急いでるからかもしれねえが、エレベーターの動きがいつもより遅い気がして、苛立たしいぜ。

「ほら、早くしろよ」

って、機械に言ったところで、どうしようもないことはわかってんだけどな。

足の爪先でせわしなく底を叩いて時間をつぶす。一階に着くと、半分こじ開けるようにして扉を開き、勢いよく口

ビーに出て——俺は絶句した。コジユウタ率いる背広野郎たちが、俺の行く手を阻んでいやがったんだ。

「どこに行きなさるんです？ 坊ちゃん」

コジユウタが、いつにない低い声音で訊いてきた。

異様に恐えけど、ここで怖じ気づいちや駄目だ。

「ちよつと私用があるんだよ。邪魔すんな」

あくまで強気に答える。と、コジユウタがかぶりを振った。

「なりやせん。社長の言いつけを破ったら、坊ちゃんでもどうなるかわかりやせんぜ」

ぐ……。確かに、親父の命令に逆らったらあんまり……つつーか、全然いいことは起こんねえけど。笠岡の一大事なんだ！

「時間がねーんだ。どけ！」

駆け出し、強引に野郎たちの間を通り抜けようとした。が、やっぱり技量と経験量の違いだよな。全然うまくいかねえ。

くそつ。どうしたらいいんだ！？

「坊ちゃん。なんでそんなに急いでるんでやすか？」

唐突に、コジユウタが訊ねてきた。

コジユウタと目が合う。と言っても、こいつはグラサンつけてるから、本当に合ってるのかどうかはわかんねえよ。んなことはどうでもいいし。

それより、俺はどう答えようか迷った。多分、こいつらに嘘は通じねえ。かといって、笠岡のことを話すのもまずい。こうなったら――。

「俺の知り合いの女が、ちよっとピンチなんだよ。だから急いでんだ」

こんな感じで、曖昧に言やいいんだよな。

俺の返答に、コジユウタは何も喋らない。考え込んでいるみたいだ。

その時、コジユウタの後方のフロントにいる女性がこっちに駆けてきた。コジユウタの耳に、何か囁いてるぞ。何言ってるんだろ？

言い終えたみたいで、フロントガールが戻っていく。と、コジユウタが俺に一步近づいた。なんか……

「社長がお呼びだそうです。一緒に行きましょう」

コジユウタの言葉に、俺は苦笑した。

やな予感、見事に的中だ。

目の前の執務机に、親父がいる。黒いふかふかの椅子に座って、こっちを見つめてくる。

俺はちらりと横を見た。すぐそばにコジユウタが立っている。こいつは、どこを見てるのかわかんねえな。グラサン取ってくれたらわかるんだろうけど。

「いったい何の用だよ」

言いながら、俺は親父に目を戻した。

「俺、急いでんだよ。用があるなら早くしてくれ」

そこまで言うのと、親父が口を開いた。あんまり機嫌のよさそうな声じゃないな。

「部屋から出ていいと、誰が言った」

けっ。そんなことかよ。

「誰も言ってねえよ。俺が出たいから出たんだ」

「お前は自分のことが何もわかっていないな」

「はあ？」

俺は盛大に顔をしかめてやった。俺のことが何もわかっていないなんて、てめえの言える台詞かってんだ。

「気づいていないだろうが、お前は多数の同業者に狙われている。むやみに部屋から出ると、死ぬかもしれんぞ」

「ンなことあ、わかってるよ」

俺の反応に、親父のほうに驚いたみたいだ。ザマーミロ。こう見えても、俺の命が狙われまくってるのは、笠岡のおかげでよく知ってたんだよ。笠岡も俺の暗殺者だし。

よく考えたら、その暗殺者を助けに行こうとしてるんだよな、俺。不思議な話だぜ。

「ハガネよ。お前、笠岡ミサと接触したな？」

「なっ!？」

今度は、俺のほうがちびびった。なんで親父が笠岡のこと知ってるんだ!？」

「なぜわたしが知ってるのか、と思ってるんだらう？」  
ああ、そうさ。

「お前のふたつ目の仕事で、ジャネスト教の神父以下数名の男が死んだのは、お前が一番よく知っているな？」

俺は頷いた。

「彼らは皆、首を刺されて死んだらしい」

「ここら辺から、親父の口調が厳しくなった。しかも、目が鋭く光ってる。——いや、実際には光ってないんだけど、何っ—か……光って見える。イメージ的に。」

「では訊くが、お前はナイフ投げが得意だったか？ 違うな。お前はまだ、射撃訓練しかしたことがないはずだ。」

ナイフ投げができるはずがない」

うおっ。全身から冷や汗が……。

「写真で見る限り、あの切り口と刺し方は『笠岡ミサ』  
のものだ。お前のような素人とは、わけが違う。ごまかしは効かんぞ」

「別に……ごまかしてなんかねーよ」

俺は何度も空振り——っ—か、空開きする口で、  
かろうじて言い返した。

「笠岡ミサとは、いつから会ってた」

と、親父が訊いてくる。

俺は無然として言っただけ。

「何でそんなこと答えなきゃなんねーんだよ」

「答える。お前の命に関わるかもしれない」  
ちっ。親父も負けてねーな。

しかし、素直に答えてやるのもシヤクに触るぜ。どうしようか。

——ルルルルル、ルルルルル——

唐突に、デスク上の電話が鳴りだした。親父が受話器を手に取り、耳に当てる。すぐに、「そうか」と一言だけ呟いて、受話器を戻した。

親父の目が俺に向いた。

「なんだよ」

俺は仏頂面をつくって訊いてやった。

「この付近で発砲事件があったらしい。二百メートルほど離れたところにある電話ボックスが現場だ。そして発砲直後、中学生くらいの少女が走っていくのを、数名が目撃したらしい。お前はと思う？」

「どう思うって……」

「笠岡ミサだと思わんか？」

「——だったらどうすんだ」

「捕らえる」

親父の冷やややかな声が、俺の耳に届いた。

「そ、それで？」

俺は震える声を吐いた。親父は表情を変えない。

「お前は知らなくてよい」

「そうかよ！」

吐き捨て、俺は親父に背を向けると駆け出した。

「ハガネ。お前は、笠岡ミサを見つけてどうする気なんだ？」

背後から親父の声がした。どうするって……助けるに決まってるんだろ。たとえ俺の暗殺者でも、命の恩人なんだからな。

社長室を飛び出した俺は、通りがかりに消化器を取って、エレベーターに乗り込んだ。社長室のある階が十八階だから、一階まではかなりある。けど、俺も馬鹿じゃねーから、こいつで一階まで下りたりしねえよ。

七階と二階のボタンを押し、七階で降りる。二階はダミィーだ、へっへっへ。でもって、七階からは階段を駆け下りた。

あとは、階段にどれだけ邪魔が現れるか、だな。

と、そういう言ってるうちに、もう三階じゃねーか。誰も俺を止めようとしねえ。知った奴とも何人か通りすがったのに、挨拶だけだ。となると……二階と一階に張ってやるのか？

「いない……か？」

2階の通路に立ち、俺は辺りを見回した。なんか、拍子抜けだ。なんで誰も俺を捕まえねーんだよ？ まあ、好都合だけど。

その時、背後に人の気配がした。びびったから、すげー

勢いで振り向いちゃったよ。

「ハガネ様」

俺の後ろにいたのは、ひとりの女社員だ。長い黒髪を綺麗に結って、眼鏡をかけ、にこやかに微笑んでる。これが、普通の会社の社員なら問題ねえんだけど、ここにいる奴らじゃ、笑顔は返って怪しすぎるぜ。何企んでるのか、わかったもんじゃない。

「社長から、外出許可が下りました。どうぞ、正面玄関からお外へおいでになってください」

「は？」

俺の怪訝顔などよそに、女社員はとっとと去っていく。

親父の奴……いったい何なんだ？

2

何事もなく——いや、いろいろあったけど——俺はビルの外に出た。駐輪場にある俺のバイクに乗って、問題の事件現場へと直行する。ポリの奴らがタカッてるもんだからなかなか見えないが、確かに、電話ボックスのガラスが派手に割れてる。

で、とりあえず近くの人に聞き込みして、笠岡の行方を捜してみた……んだけど。

「わかるわけねーじゃん」

と、むなしいひとりツツコミをかます。なんか裏街道歩いてるし、俺。

「疲れたー」

たっぷりと息を吐いて、空を見上げる。もう星が見え始めてるぜ。冬って、暗くなんのが早いんだよなー。そろそろ族が暴走し始めそうだぜ。

「……帰ろうかな」

呟いてみたりする。俺は慌てて頭を振った。

「まったく、何考えてんだよ、俺。弱気吐くんじゃねーってんだ。」

「ふぁ……」

あくびが出そうになった途端、俺の体に、何か塊がぶつかってきた。よろけるどころじゃねー。道路にぶっ倒れちゃったよ。

「な、なんだ!？」

急いで起きようと思ったけど、上に乗っかられて起きられない。

その時、喉にひんやりした感覚が……。ナイフか!？」

「死にたいの?」

俺の捜していた声が聞こえた。

目を凝らす。星空をバックに、人影の顔がはっきりと見えてきた。間違いない。笠岡だ。

「笠岡」

声を出すと、喉が動いてナイフの感覚が一層強くなった。

「こんなところで何してるの？ わたしはあなたの暗殺者なのよ。樫川さん、狙われてる自覚あるの!？」

笠岡の叱責が降ってくる。

「俺は……」

言いかけて、俺は目をそらした。と、笠岡の左上腕部に、布が巻かれているのが見えた。暗くてよくわかんねえけど、あの滲んでるの、きつと血だ。

思わず、俺は上体を起こした。ナイフのことなんかすっかり忘れてたぜ。笠岡が仰天してナイフを引いてくれたおかげで、刺さらずにすんだけど。そんなこと、どうでもいい。

「やられたのか!？」

笠岡の左手首を掴んで、問う。傷が痛んだらしく、笠岡の表情が少しだけこわばった。

「あ、ご、ごめん」

慌てて手を離す。すると、笠岡が立ち上がって二歩退いた。遅れて、俺も立ち上がった。

「あなたは甘すぎる」

小さく——でも淡々と、笠岡が喋り出した。

「わたしの心配なんかしてないで、自分の心配でもしたらどうなの？ さっきわたしが怯んだ隙に、いくらでも攻撃できたはずよ。わたしは、あなたを殺そうとしているん

だから。それくらいするのが当然でしょう？」

「本気で殺す気なら、ナイフを引いたりするのかよ」

言い返すと、笠岡の表情に動揺が現れた。

俺は、まだ続ける。

「本当に殺そうってんなら、電話であんなこと言ったりするのかわよ」

笠岡は何も応えない。

「『あの人』に命じられたんだろ？ 俺の暗殺。どうせ、俺みたいな奴がちよこまか逃げたところで、笠岡みたいなベテランに狙われちゃひとたまりもねーんだ。無駄なことはない。俺、ここでじっとしてるから、さつさとやってくれよ」

言い切って、俺は臉を閉じた。何も聞こえない。いや、遠くで微かにパレードの音がするな。毎夜毎夜よくやってくる。族達は。

しばらくその音に聞き入っていると、笠岡の震え声が耳に届いた。

「そんなこと……言わないでよ」

俺は目を開いた。少し離れたところに、笠岡が立っている。彼女の瞳が微かに揺れた。涙か？

「……笠岡？」

「やだ。わたし、何迷ってるんだろう？ あの人の命令を遂行しなきゃ。チャンスなのに。いいチャンスなのに……」

…」

笠岡はこめかみに右手を当て、迷いを振り切ろうとしてる。でも、今にも泣き出しそうな顔だ。ンなこと言ったら怒られるかもしんねえけど、笠岡、ホントは殺しなんかしたくねーんじゃねえか？

笠岡の口元に微笑が浮かんだ。

「でも、もうわたしには無理。樫川さんには、こんなにも味方がついているんだもの」

「なに？」

笠岡の言葉が理解できなかった。そう、笠岡の周りに数人の人影が現れるまでは――。

「笠岡！」

四方八方から出てきた背広連中に、笠岡は組み伏せられ、縛り上げられていく。俺は飛び出そうとしたが、がっちりとした手に肩を掴まれた。

振り返る。コジュウタがいた。

「坊ちゃん。お迎えに上がりやした」

「お前の仕業か、コジュウタ！」

平然と言うコジュウタを、俺は怒鳴りつけた。

「帰りましょう。坊ちゃん」

「てめえ……」

コジュウタの変わらない台詞。血がすさまじい勢いで頭にのぼる感覚がした。肩に置かれた手を振り切って、懐か

ら拳銃を取り出す。

「いい加減にしやがれ！」

ミサのほうを振り向きざま、まともに狙わないで、俺はトリガーを引いた。弾は背広野郎の1人に当たったらしく、肩を押さえて呻いている。

俺は構わず、もう二弾を連発した。これを避けるべくか、背広野郎どもがミサから離れた。

「坊ちゃん！」

背後でコジュウタの声がするが、構わねえ。ミサに歩み寄り、周りに銃口を向けた。

「これ以上、笠岡に何かしてみる。てめえら皆殺すぞ」  
威嚇し、今度はコジュウタに目を向ける。コジュウタも、じつとこつちを見てきた。

「坊ちゃん。こんなことをして何になるんでやす。社長は坊ちゃんの安全を考えて……」

「うるせえよ」

俺はコジュウタを睨み据えた。

「笠岡は俺を殺さねえ。お前も聞いてただろ？ それなのになんで捕まえる。これを口実に、ライバル会社に喧嘩を吹っかけるつもりなんじゃねーのか？」

コジュウタは口を噤んでる。考えが的を得ていたんだろ  
う。

俺は口を開いた。

「とつとと帰りやがれ。親父の思い通りにはさせねえ」  
「すいやせん、坊ちゃん」

突然コジュウタが謝ってきた——かと思うと、俺の右手に衝撃が走った。音を立てて、拳銃がアスファルトの上に落ちる。コジュウタを見ると、右手に拳銃を握っていた。サイレンサーつきの拳銃だ。

「お連れしろ」

コジュウタの声を合図に、背広野郎たちが俺を捕まえにかかった。俺だって、そう簡単に捕まえられるわけにはいかねーんだ。必死で抵抗した。

「うっ」

俺の口元に布が押しつけられた。ただの布じゃねえ。この感じは……催眠薬か。

急速に視界が揺らぎ始める。どこかに吸い込まれるような感覚が、俺を襲った。

情けねえ。なんて無力なんだ、俺は……。

3

うう……頭がくらくらする。気分悪い。

「畜生」

毒づき、俺はうつすらと目を開けた。見慣れた白い天井、蛍光灯。——そうか。ここは俺の部屋だ。

俺はベッドの上にいた。なんでこんなところにいるのか一瞬わからなかったが、すぐに思い出した。笠岡を助けようとしてコジュウタに拳銃を撃たれ、睡眠薬を嗅がされたんだ。俺。

布団をどけ、靴を探す。ご丁寧にも、ベッドのそばにきちんと並べられてるぜ。早速それを履いて、ベッドの上に腰を下ろした。

——コン、コン

不意に、扉がノックされた。どうせコジュウタだろう。何をしに来たんだよ、今さら。

ガチャリ、と扉が開いた。

「失礼しやす」

コジュウタの声がする。俺は扉に見向きもしなかった。

「夕食を準備ができてやすが、お持ちしやしようか？

姐さんと社長は、もう召し上がりやしたが」

お袋と親父なんて関係ないじゃねえか。いつも別々に食べてんだからよ。

俺はそっぽを向いたまま、「いらねえ」と答えた。

「それはいけやせん。食事はちゃんと摂らないと、体に毒ですぜ」

「お前の知ったことかよ」

うっとうしい野郎だ。さっさと出ていってくれよ。

一刻置いて、コジュウタが再び喋りだした。俺の心を見

透かしたような一言だ。

「笠岡ミサが心配でやすか？」

初めて、俺は振り向いた。コジユウタは直立不動の状態  
で、1メートルほど離れたところにいた。

「ひとまず監禁室に閉じ込めてありやす。まだ尋問は行っ  
てませんが、明日には……」

「なんだと!？」

俺は勢いよく立ち上がり、コジユウタの胸ぐらを掴んだ。  
コジユウタのほうが背が高いから、あんまり様になってね  
えけど。

唾を飛ばす勢いで、俺は怒声を上げた。

「『尋問』って言っても、名ばかりで『拷問』のことだ  
ろうがっ。そんなこと許さねえからな!」

「いえ、拷問はしません。せいぜい自白剤までです。笠  
岡ミサを傷つけはしやせん」

「本当だろうな!？ 嘘だったら承知しねえぞ!」

「わかってやす」

「そうか」

吐息し、俺は胸ぐらを放した。うなだれるような格好で、  
ベッドに座り込む。

「なんで、こんなことになっちまうんだろうなあ……」

でもそれ、親父が言ったのか？」

「はい」

「何か企んでんだろうな。きつと」  
コジユウタを見上げる。コジユウタは宙を見ているみた  
이었다。

「なあ、コジユウタ」

「はい」

「俺、これから笠岡のとこ行って来るよ。二人だけで話  
したいから、ついて来ないでくれ」

少し遅れて、コジユウタが「はい」とだけ言った。

「あまり長話はできませんよ」

「わかってるよ」

見張りに応え、俺は鉄扉を閉めた。後ろに向く。簡易ベッ  
ドの上に、笠岡が座っていた。

監禁室は狭い部屋で、簡易ベッドと、かなり狭いトイレ  
へのドアしかない。お袋が衛生にうるさいから、トイレが  
別室にあるんだけどな。そこにも隠しカメラがついてるん  
だ。女の子には残酷すぎるぜ。

「ごめん」

俯いたままこちらを向こうともしない彼女に、俺は静か  
に謝った。

「俺が笠岡の言う通りにしてたら、こんなことにならな  
かったのにな。俺、大馬鹿野郎だった」

「……謝る……ない」

笠岡が何か呟いた。よく聞き取れなかったけど。

「あなたが謝る必要なんて、ないよ」

今度ははっきりと聞こえた。笠岡が顔を上げる。その顔には、うっすらと優しい笑みさえ浮かんでいた。

「捕まったのは自分のせい。樫川さんに誰かについているのは予想できたことなのに、不用意に飛び出したわたしが悪いのよ。樫川さんは、あの人たちに感謝しなきゃ」

「笠岡……」

笠岡の笑顔を見ると、なんか胸が痛い。どうしたらいいかわからねえ。立ち尽くすしかないのか。

笠岡が喋りかけてくる。

「もう行ったほうがいいよ。捕虜のわたしと、あまり話してられないでしょ？」

「んなこと、構わねえよ」

俺はかぶりを振った。

「それに、笠岡をこんなトコに残していけねえ。俺の命の恩人なんだぜ？ もっと上等な扱いをしてもいいくらいなのに」

「違うよ、樫川さん。わたしは暗殺者。あなたを狙ったのよ。ジャネスト教会でのことも、これまでのことも、手柄を横取りされたくなかったからなの。あなたを他の人間に殺されなくなかったから。それだけよ」

嘘だ。平然と言うけど、嘘の感が混じってる。

でも、それを訴えたところで、素直になつてくれるんだろうか。本当の気持ちなんて、俺に言ってくれるはずがねえよな。でも今教えてくれたら、明日、無理矢理訊かなくてもよくなるんじゃない。

「か……」

「坊ちゃん」

後方からの声が、俺の声を遮った。

振り返る。鉄製の扉を開け、見張りがいた。

「もうそろそろ時間です」

「あ、ああ」

適当に応答し、俺は笠岡に目を戻した。視線が合う。笠岡は手で、「行け」と示してきた。

俺、どんなに複雑な顔をしてるだろう。どうしようもない。困り切った。そんな感じだろうな。

笠岡に背を向ける。喉に言葉を詰めたまま、部屋を出た。なんだか、メチャクチャいやな予感がしてならねえよ。

4

「毒ガス!？」

俺はベッドから飛び起きた。傍らに立つコジユウタへ詰め寄る。

「なんで監禁室に毒ガスが出るんだっ。笠岡は無事なの

か!？」

「今は医務室にいやすが、大事には至りやせん。自らを仮死状態にして、やり過ごしてやした。見事なモンです」

これを聞き、俺の体から力が抜けた。

「そう……か。よかったあ」

ベッドにへたり込む。ホント、心底よかったぜ。笠岡が死んだりしたらどうしよーかと思った。

にしても、なんで――。

コジユウタを見上げる。

「ところで、なんで毒ガスが？」

すっげー疑問だよな。これは。

少し間を置き、コジユウタが話し出した。

「スパイがいたようです。児島リョウジ、入社一年。入社当時は本人ですが、途中ですり替わってやすな。この会社に限ってそんなことはあり得ないのでやすが、内部に手伝った者がいるとしたら……それも会社の重役だとしたら、万にひとつであり得るかもしれやせん」

「で、そいつは？」

「駆けつけたところには、もういやせんでした。見張りは監禁室に放り込まれ、毒ガスで死亡。児島の姿は、監禁室の超小型カメラ以外どのカメラも捉えてやせん。手際がよすぎやすな」

この口調……コジユウタ、何か知ってやがるんじゃない

か？

「コジュウタ。お前、何か知ってるのか？」

問うと、コジュウタがグラサンをはずした。初めて見るわけじゃねえけど、義眼の片目にはいつもどきつとする。

裸眼と半分小型カメラみたいな義眼が、じっと寂しそうな眼差しを向けてきた。どうしたんだ、いったい。

「坊ちゃん。真の敵は内部にいやす。笠岡ミサは、むしろ味方かもしれやせんな」

コジュウタの言葉の変化に、俺は一瞬呆然とした。

「これは聞いた話なんでやすが」

ゆつくりと、コジュウタが語り出す。

「坊ちゃんを狙っていた輩の大半を、彼女が仕留めたそうです。手柄を取られたくなかったからなのか、真意はわかりやせんが」

「本当なのか、コジュウタ」

訊くと、コジュウタは虚空に目を向けた。

「さあ……なにぶん、聞いた話でやすから」

## 第五話

1

医務室の中。白いベッドの上に、笠岡が寝ていた。ここには、俺と彼女しかいない。部屋の外には、もちろん見張りがいるけどな。

「笠岡」

呼びかけると、笠岡が目を薄く開いた。一度俺のほうを見て、目を逸らす。

「なんでかしらね」

笠岡が呟いた。悲しげな声だ。

「別に死んでもいいのに。無意識のうちに自分を守ってしまう」

「笠岡！」

俺の大声に、笠岡は反応を示さない。俺は拳を握りしめた。どうして死んでもいいなんて言うんだ？ 俺は……俺は笠岡に死んで欲しくない。

笠岡の目がこつちを向いた。

「樫川さん。なんでわたしが殺されかけたと思う？」

唐突に訊いてくる。そんな、いきなり訊かれてもわかん

ねえけど……

「俺を殺さなかったからか？」

「それも理由のひとつ」

天井を見、笠岡が続けた。

「もうひとつ——最も重大な理由は、わたしが捕まったから。生かしておいたらまずいのよ。会社側としたらね」

会社？ 笠岡の所属してる会社のことか。でも、笠岡みたいな社員を殺そうとしたりするのかわか？

「わたしみたいな社員は特に、よ」

俺の頭中を読んだかのように、笠岡が言った。

「いろんな情報を持つてるし、洗脳されたらいくらでも利用される。会社はそれが嫌なの。当然だけどね」

——洗脳。笠岡はさらりと saying のけたけど、俺には聞き流すことができなかった。笠岡が洗脳されるってのかわか？

それも、この会社に。そんなこと——

「洗脳だなんて、俺が絶対にさせねえ」

叫びたい気持ちを抑えてるせいかわ、握りしめた拳が震えてる。

「ありがとう」

俺のほうを見、笠岡が微笑んだ。

「榎川さんのそんなところ、昔のあの人に似てる」

寂しげに呟く。また「あの人」だ。いったい誰のことかわか？

訊こうと口を開いたとき、笠岡が喋り出した。

「あの人もね、昔——と言っても七年くらい前のことだけど、あの頃は凄く優しかった。奴隷商人からわたしを助けてくれて、住む場所も食べ物も与えてくれた。でも、あの人は社長の御曹司で、わたしをただ育てるだけ、ということができなかつたの。一流の社員にするという条件で、社長を説得したのよ」

笠岡の視線が、宙に向いた。

「本当に優しかった。けど、社長が病気で亡くなって新社長の座に着いた頃から、あの人は変わりだした。成り行き上、それがごく自然なのかもしれないけど……ね」

「笠岡」

笠岡の寂しそうな顔に黙っていられず、俺は口を開いた。  
「『あの人』のところに戻っちゃ駄目だ。恩返しはもう充分しただろ？ もう暗殺なんてしなくていい。これから自由に生きようぜ」

なんでこんなことを言ったのか、自分でもわからなかつた。

笠岡が振り向く。

「ありがとう。でも、今の世の中、どこにいても状況は変わらない。わたしは特級の暗殺者。名前が知れすぎてるもの。フリーになつたとしても、各地から無数の殺し屋が殺しに来る。自分の名を挙げるためにね。殺されないため

に、その人達を殺して……結局は同じよ。することは何も変わらない」

言い終えると、笠岡は俺に背を向け、黙りこくった。

笠岡の言うことはもつともだ。こんなことを言われたら、もう俺に言えることはねえ。今は何言っても、ただの馬鹿な慰みごとにしかならねえよ。

俺は笠岡に背を向け、静かに医務室を出た。ドアの向こうにはコジユウタが立っていた。

「どうでしたか？ 笠岡ミサの状態は」

訊いてくるコジユウタに、俺は首を振った。

「生きる気力もなくしちまったみたいだ。昨日までは、そんなにでもなかったのに」

「積もっていた思いが、一気に吐き出されたんでしょうな」

「ああ」

「今はそつとして置いてやりやしよう」

「そうだな」

頷き、コジユウタを連れて自室に向かう。部屋に入ると、俺はコジユウタと向かい合った。コジユウタのグラスアンを見つめる。

「コジユウタ、知ってるんだろ？ 誰が犯人か。誰が今回の事件の黒幕か」

コジユウタは答えない。

「教えてくれ。そいつは誰なんだ？ 身内にいるんだろ？」

まだコジュウタは口を閉ざしたままだ。俺は口調を少し荒くした。

「笠岡がまた襲われる前に、手を打たなきゃなんねーんだ。頼むから教えてくれ！」

「坊ちゃん」

コジュウタが口を開いた。ようやく話す気になってくれたのか？

「この件に関しては、あつしにお任せください」  
なに？

「二度と笠岡ミサが狙われぬよう配慮いたしやす。だから、坊ちゃんは何も気にせず——」

「コジュウタ！」

俺はコジュウタの言葉を遮った。驚いた様子もなく、コジュウタが俺を見下ろしてくる。

「黒幕を教えねえつもりか!? そこまでして俺に教えない奴なのか!？」

言いたいことを吐き出し、俺はコジュウタの反応を待った。コジュウタの表情は相変わらずだ。——そう言えば、こいつの焦った顔とか見たことないな。

しばらくの間、俺はコジュウタを睨み続けた。コジュウタも頑固な野郎だ。一向に口を開こうとしねえ。そんなに

言いたくねえのか？ 俺に知られちゃまずい人物なのか？  
考えろ。俺に知られたくない奴って誰だ？ 俺がよく知  
てる奴か、俺が最も知らない奴か……。昨日のこいつの台  
詞からすると、黒幕は社内で権力を持っている奴？ って  
ことは、幹部以上か。俺の知ってる幹部って誰がいる？  
最高権力者の親父に、次権力者のコジユウタ。あとは江藤  
に佐田橋に加山に――。

「坊ちゃん」

「あん？」

俺はコジユウタを見上げた。コジユウタが喋り出す。

「黒幕を知って、坊ちゃんは どうするんでやすか？」

なに？

「さっき言ったじゃねえか。笠岡が襲われないように――

――

「具体的に、どう対策を取るんです？」

「具体……的に？」

俺は戸惑った。こう質問が来るとは思ってた。こいつは

具体的も何も、まず相手を見極めなきゃ取りようがねえよ。

「仮に、あつしより権力があると思ってくだせえ」

コジユウタが言い足した。

コジユウタより権力がある奴って、親父しかいねえじゃ

ねえか。まさか親父が……？

「おい。まさか親父が黒幕か？」

「答えられやせん。それより、坊ちゃんはどう対策を練るんでやすか？」

ちっ。しぶとい野郎だ。でも、ヒントは得られたな。

「それに答えたら、黒幕を教えてくれるのか？」

問うと、コジユウタはわずかに頷いて見せた。

「内容によつては、あつしの見解をお教えしやす」

よし！ そういうことなら答えてやるぜ。

つつーでも、実際どうすりゃいいんだ。コジユウタより権力があるだと？ 親父を相手にするとしたら、俺は何ができる。直に親父を殺すのはいい方法か？ それに、親父を殺すのは簡単な仕事じゃねえ。俺には手に余る。コジユウタの手を借りるか。コジユウタなら親父を殺るだけ力がある。——くそつ。なんて他力本願なんだ、俺は！ 自分でなんとかできねえのか!?

待てよ？ 親父を殺れねえなら、こつちから消えてやればいいじゃねえか。笠岡を連れて、どこか遠いところ——火星辺りに。あそこまで逃げりゃ、さすがの親父も多勢を向けられねえだろ。だったら、俺でも刺客を殺れる。武器は、とつておきの光線銃を持って行こう。あれだったら反動もねえし、俺でも早撃ちができるぜ。

——あ！ いい手があるじゃねえか。笠岡を死んだことにすりゃいいんだ。コジユウタに手伝ってもらって、俺の独断で殺したことにすりゃあいいじゃねえか。そーすれば、

もう笠岡が狙われることもねえ。

俺は口を開いた。

「コジュウタ、手伝ってくれ。笠岡を『殺した』ことにするんだ。お前の権力と俺の存在があれば、不可能なことじゃねえだろ？ あとは、俺が家出をすりゃあいい」

「坊ちゃん」

コジュウタがかぶりを振った。

「その手は、社長には通じやせんぜ」

「やってみなきゃわかんねえよ」

「わかりやす」

ちっ、強情な野郎だ。チャレンジ精神に欠けてるぜ。

でも、コジュウタがいないと、この案もうまく行きようがねえからな。なんとしてでも協力してもらわねえと。

「コジュウタ。危ない橋を渡ってみんのが、男ってモンだろ？」

「無茶にもほどがありやす」

そうかよ。ったく。根性ねえな。じゃあ、どうすりゃいいんだ？

俺が考えに耽っていると、コジュウタが喋りかけてきた。

「坊ちゃん。あつしはこれから用事がありやすので、失礼しやす。笠岡ミサのことはご一任くださいませ」

「あ。おいっ」

コジュウタの奴、言うだけ言って去りやがった。ご一任

くださいってよお。まあ、しようがねえ。次の案が思いつくまでは、あいつに任せておくか。信用できるからな。

俺は事務机に近づき、一番下の引き出しを引いた。黒光りのする拳銃が現れる。見た目からして普通の銃じゃねえ。多分、見たことのある奴も少ねーんじゃないかね？ 世界最小の光線銃。連続して撃つたら一分くらいしか——いや、一分も持たねえかも。けど、威力は抜群だ。換えの専用電池を数個持つてりや大丈夫だろ。ビーム銃は、ジーンズの後ろにでも差しておくか。

——よし。笠岡のそばで張ってよう。誰も襲わねえように。

2

「坊ちゃん」

あ？

「こんなところで寝てたら、風邪ひきますよ」

寝てる？

やべ。俺、寝ちまってたんだ。起きねえと……。

俺は目を開けた。見かけねえ顔の野郎がいた。周りを見る。俺、医務室の扉にもたれかかったまま寝てたんだな。

「お前は？」

立ち上がりながら、俺は野郎の顔を見た。野郎が答える。

「自分は見回りです」

「ふーん。何か変わった様子は？」

「ありません」

そっか。まだ敵は動いてないか。

野郎が去るのを見てから、俺は扉の覗き窓から医務室の中を覗き込んだ。笠岡は相変わらず寝てるみたいだ。疲れが溜まってたんだろうな。今のうちになくしてくれ。そうすれば、きっとまた笑顔が戻ってくるさ。

俺は医務室に入ると、ベッドのそばにあるパイプ椅子に腰を下ろした。すると、笠岡が目を開いた。俺のほうに顔を向ける。

「樫川さん」

「あ、ごめん。起こしちゃったな」

俺が素直に詫げる。と、笠岡が微かに笑った。つつーても、なんか微妙な笑みだ。よくはわかんねえけど。

「ねえ、樫川さん」

「ん？」

「お願いがあるんだけど……聞いてくれる？」

遠慮がちに笠岡が訊いてくる。笠岡が俺に頼みごとなんて珍しいな。でも、なんだか嬉しいぜ。俺は揚々と頷いた。「ここから脱出したい。だけど、わたし一人じゃ無理なの。手伝ってくれる？」

「え……」

俺は呆然と笠岡の台詞を聞いていた。まさか、こう来るとは思わなかったぜ。さつきは「逃げてもしかたがない」ようなこと言ってたから。こいつあ、生きる気力が戻ってきた証拠なのかもな。だったら、大賛成だぜ。

俺は再度頷いた。

「オーケー。任せてくれ。俺がちゃんと、突破口を開いてやるよ」

「ありがとう」

笠岡が笑った。そう、この笑顔だよ。笠岡はいつも笑ってなくちゃな。いつもとちよつと違う気もするけど、気にしねえよ。

笠岡が口を開いた。

「それじゃあ、わたしの言う通りに爆弾を設置して」

「おう」

「全部で二つ。どちらもビルの中よ。一つはこの部屋から最も離れた場所に。もう一つはこの部屋に。初めのほうを少し派手にして。爆発の時間差は三秒。もちろん、ここにつけるヤツが先よ」

「お、おい」

俺はちよつと焦った。だって――

「この部屋につけちゃ、まずいんじゃないか？ 笠岡、死ぬぞ」

「火薬を調節すれば大丈夫よ。発煙弾も一緒に使えばい

いわ。樫川さん、爆薬の知識あるよね？」

「一応」

薬のことも、コジュウタがしっかり教えてくれたからな。並の知識はあるし、扱いもできる。

「ここのが爆発したら、すぐに来て。この拘束具をはずして欲しいの」

「わかったよ。時間は？」

「今夜九時」

九時？ やけに早いな。

「もつと遅いほうがいいんじゃないか？」

「遅すぎると、警備が厳重になるわ」

そうか。

「もう行つて。監視員に怪しまれる」

「あ、ああ」

なんだ？ 急に笠岡の声が冷たくなったような……。緊張してんのかな？

まあ、いいか。とつと準備しなくちゃな。

3

そろそろだ。午後九時——階下で爆発が起こる。俺は駆け出した。すぐに上方から爆音が聞こえる。で、ビルが揺れる——はずなんだけど、揺れねえ。おかしいな。念のた

め二つつけたし、火薬の量は間違つてねえと思うんだけど。音もでけーしな。

まー、いいや。いちいち構つてられねえぜ。今は笠岡のところへ行くのが先決だ。

「うわっ」

階段を下り、俺はびびった。思った以上に煙が出てるぜ。赤外線スコープを持って来て正解だな。

ん？ 人だ。見張りにいた奴だな。そいつに手刀を当て、俺はひたすら医務室に向かった。数人の医務員に出くわしたけど、裸眼のあいつらには俺の姿が見えねえからな。潰すのに時間はかからなかったぜ。

「笠岡！」

医務室に入り、俺は早速、笠岡につけられてる拘束具をはずし始めた。鍵はあらかじめ取つてあるんだ。一分ほどで全ての枷をはずせた。

「ほら、笠岡の分」

俺は赤外線スコープを笠岡に渡した。

「行きましょ。案内して」

笠岡が囁いてきた。俺は頷き、走り出した。階段を下りれば、そこが一階だ。今なら、正面玄関から堂々と出ても問題ねえだろ。

ビルの外に出ると、俺達は物陰に見を隠しながら進んだ。近くに俺のバイクを置いてあるんだ。そいつに乗って、一

気从这里から離れよう。

「じゃあ笠岡、とりあえず栃木のほうに——」

「二番街へ行って」

笠岡が俺の提案を遮った。

……にしても、なんで二番街なんだ？ あそこはただの  
廃屋街じゃねえか。

「お願い。行って」

笠岡が頼んでくる。

「……わかった」

俺は答えた。わかったけど、一体何があるってんだよ？  
とりあえず俺は後ろに笠岡を乗せ、バイクを転がした。  
二番街までは七キロほどしか離れてねえ。着くのに大して  
時間はかからなかった。

バイクを止める。夜中の廃屋街は、なんか不気味だぜ。

「なあ、こんなとこに来てどーすんだ？」

背後に振り返り、俺は笠岡に訊ねた。笠岡は無言でバイクを降りると、前方へと向かって歩き始めた。どこに行くつもりだ？ 俺もバイクに乗ったままついて行った。

うっ。なんだ？ いきなり悪寒が……。

「よくやった、ミサ」

俺の知らねえ声が響いた。冷やかな男の声だ。

なんだ？ 向こうに人影が見えるぞ。三人か？ 中心にいるオールバック野郎は……なんだか見覚えがある。

俺達は立ち止まった。オールバック野郎が微笑んでる。あの笑みは、笠岡に向いてるんだ。

「お前の失態は水に流そう。社に戻ってきなさい」

これはオールバックの台詞だ。なんなんだ？ この野郎。

社に？ まさか――。

「本当に、許してくださるのですか？」

笠岡がこんなことを言うなんて……。

「もちろんだよ」

オールバックが優しく笑う。きつとそうだ。こいつ、間

違いねえ。

「タイチ……社長」

笠岡が一步進み出た。

やっぱりな！ この野郎、笠岡ンとこの社長だ！

「笠岡！ 行っちゃ駄目だ！」

声を張り上げ、俺はバイクを捨てて駆け出した。けど、

立ち止まらざるを得なかった。社長の両脇にいる黒服が、

俺に銃口を向けてきたんだ。

「動かないでもらおうか。樫川グループの御曹司くん」

ちつ。ヤな笑い方するぜ、このオールバック野郎！

俺はオールバックの目を睨みつけた。

「野郎！ 笠岡をどうする気だ!? 笠岡は、もう、ためえ

らと関りたくねえんだよ！」

「それは君の思い込みに過ぎない」

オールバックが言う。過ぎなくねえんだよ、この野郎つ。  
俺は笠岡の思いを見たんだ！　なんで笠岡が俺を殺さなかつたのか、てめーにわかるか!?

「さあ、おいで。ミサ」

社長に招かれるまま、笠岡が進んで行く。俺から離れて行く。

なんでだ？　なんで〈殺し〉の世界に戻るんだよ？　もう嫌なんじゃないのか。人殺しすんの、嫌なんじゃないのか？

「樫川くん」

馴れ馴れしく呼ぶんじゃないやねえよ、オールバック。

「信じられないといった顔をしているな。よく考えてみたまえ。ここに来たがったのは、ミサじゃなかったかね？」  
それがどうしたんだよ。

「ミサはわたしの伝言を受け、そしてやって来たのだ。

彼女は、わたしのもとへ戻ることを望んだのだよ」

でん……ごん？　笠岡のところに伝言だった？

「誰が伝言を伝えたってんだよ」

俺の言葉に、オールバックが肩をすくめた。

「おやおや。そんなことにも気づいていなかったのか。やはり五流スナイパーだな。そう思わないか？　ミサ」

オールバックより二メートルほど手前で、笠岡が足を止めた。俺のほうに振り返る。その視線は、異様に冷たかつ

た。

「わたしにはこうするしかないの。タイチさん——社長が、榎川さんを連れて逃げて来れば許してくれるって……やっぱり、社長の右腕として生きるしかないのよ」

「そんなことねえ！」

他にもあつたはずだ。生きる道なんて……例えなくても、俺がいくらでも作ってやるよ。

「無能は無能らしく死ねばいい」

オールバックの声に、俺は目を剥いた。

「——が、ミサは有能だ。生きる価値がある。時代錯誤な平穩を望む君とは違うのだよ」

なんだ、この野郎。なんだ、その台詞。笠岡……こいつがお前を市から救った奴なのか？ そんな人間が、こうまで変わるものなのか？

「うおおー！」

俺は、ありつたけの声を張り上げた。

殺ってやる。こんな野郎、俺が殺ってやる。死ねばいいだあ？ そっくりそのまま、てめーに返してやるぜ！

ジーンズの後ろの光線銃に、俺は右手をやった。と、俺の右肩に激痛が走った。目に映ったのは、オールバックの隣で短銃を構えた野郎——。

「つくづく馬鹿だな」

オールバックが不敵に笑う。

「殺るときは黙って殺れ。誰にも教わらなかったのか？」  
教わったさ。

畜生。右肩が撃ち抜かれてやがる。血が止まらねえ。

「タイチさん。すぐに檜川グループの追っ手が来ます」

と、笠岡。

「殺すのはいつでもできます。とにかく今は、社に戻り  
ましょう」

「そうだな」

オールバックが頷いた。

「殺すのは簡単だ。少し利用するのもよかるう」

俺を利用するだと？ けっ。利用されてたまるかってんだ。俺は銃を左手に持ちかえた。一発、オールバックの額に当ててやるつもりだった……けど。

俺より早く、オールバックが銃口を向けてきた。あの型は麻酔銃かつ。

「うっ」

俺の首筋に鋭い痛みが突き抜けた。意識が朦朧として、俺は――。

4

冷たい感覚に、俺は気がついた。前髪から水が滴（した）り落ちる。誰か水ぶっかけやがったな。

「おはよう、ハガネ」

お袋の声？ 俺は顔を上げた。金色のショートヘアの女が見えた。やっぱりお袋だ。

「あ？ なんだよ」

俺が問うと、お袋が動いた。驚いたぜ。いきなり平手打ちするか？ 普通。

俺は怒鳴った。

「なんだよ、お袋!？」

「生意気ね。タクマとは大違いだわ」

タクマ？ 誰だよ、それ。

……ん？ なんか俺、張りつけにされてる感じ——って、

おい!？ なんでまた、俺が張りつけくらってんだよ!？」

「なんだよ、これ!？」

「うるさいわね」

お袋のビンタが飛んで来た。いってーよ。びびびし叩くんじゃねえつ。

——おわつ。なんかさつきから右肩がいてーと思ったら、銃創の上に火傷してるじゃん、俺。焼いて止血されたのか？

くそう。それにしても、ここはどこだ？ どっかの部屋みてーだけど、俺知らねえな。

「さーて。ゲームでも始めましょうか」

楽しそうなお袋の声。お袋、なんで拳銃に弾込めてるんだ？

「なあ、お袋」

「何？」

「何してんだ？」

「ゲームの準備よ。あんたも強制参加」

強制参加って……俺にどうしろってんだよ。俺を張りつけにしてんの、あんただろ？

ハッ。まさかとは思うけど、

「射撃ゲーム——なんて言うんじゃないぞな？」

「当たり前」

お袋が妖艶に笑った。お袋が妖艶に——って、かなりヤな感じだぜ。気持ちわりい。

「もちろん、的はハガネ」

「えっ？」

俺は耳を疑った。お袋の奴、今なんて言った？ 俺が的？ 何ふざけたこと言ってるんだ！

「悪質なジョークだぜ」

「何言ってるのよ。それこそジョークだわ」

お袋が銃口を向けてきた。刹那、銃声が響き、俺の左肩に痛みが走る。俺……撃たれたのか？

「何しやがる！」

「的は黙ってなさい」

銃口が火を噴いた。くそっ。右足が……。

「なんで……こんなことするんだ？」

畜生。痛え——けど、喋るのに支障はないな。

お袋が真顔になった。

「復讐よ」

は？ 復讐？ なんの復讐だよ。俺が何かしたか！

「悪魔への復讐。あたしの全てを奪った男への報復」

はあ？

「俺が何を奪ったんだよ!」

「あんたじゃないわ。コウスケよ」

親父？

「あんたの父親はね、あたしから全てを奪ったわ。夫も、

息子も、生活も、会社も。そう、幸せをね!」

「うあつ」

咄嗟に俺は首を傾けた。あつぶねーよ。危うく顔面を撃

たれるところだったぜ。

にしても、全てを奪ったって……どういうことだ？ 夫

と息子と会社？ 俺はいるし、親父も会社もあるじゃねえ

か。親父、何か失敗でもしたのか？ 俺はお袋を睨んだ。

「親父のしたことなんか知らねえよ！ だからって、な

んで俺が撃たれなきゃなんねーんだよ!」

「あたしのタクマが、こうやって殺されたから」

また、タクマが出た。タクマって誰だ？

「何も知らないのね」

お袋が笑った。

「じゃあ教えてあげるわ。……十六年前、あんたの父親は北尾重工——夫の会社を、卑劣な方法で奪ったのよ。ビーム兵器の最新技術を手に入れるために」

お袋が銃を下ろした。代わりに、左腰のホルスターから何かを取り出す。って、あれ、俺の光線銃じゃねえか！

「まず息子を誘拐し、夫を脅迫。かなり悩んで、ユタカは要求に応じなかったわ。そうしたら夫を車ごと爆破。タクマが誘拐された翌日のことよ。警察でも犯人を特定できなかった。——いいえ。悪魔が圧力をかけてたのよ。さすがプロよね。事を起こさず人を殺すなんて、造作もないことなんだわ」

光線銃を弄びながら、お袋が続ける。

「夫が殺された夜にね、実はあたしのところに電話がかかって来たのよ。誰だと思う？」

なんで訊いてくるんだよ。でも答えなきやキレそうだな、お袋。

俺は呟いた。

「……親父か？」

「そう。あたしに愛人になれって言ったのよ、あの悪魔。あたしは怒りで気が狂いそうだった。電話を叩きつけてやったわ。すると翌朝、あたしのもとに箱が届いたの。中に入っていたのは、体中蜂の巣にされたタクマ。言いなりにならないと、すぐに強行手段だなんて……。あたしは復讐を誓っ

た。タクマは、まだ六歳だったのよ?」

光線中の銃口が俺に向いた。微かな電子音を鳴らし、光線が俺の右耳を焼いた。神経が麻痺して痛みを感じなかったけど、嫌な匂いが鼻をついた。

「悪魔の愛人になって、あたしは機会を窺った。まず、高飛車なあなたの母親を殺して、あいつから全てを奪える——このチャンスを狙っていたのよ」

なんだと? じゃあ、お袋は——

「お袋は、俺の生みの親じゃ……」

「ないわ」

血の繋がりはない……か。そっか。へへっ。なんか、あんまり悲しくないな。俺とお袋の思い出がないからかな。

お袋が銃を動かした。今度は俺の頭でも貫くつもりか?

——コン、コン。

ノックの音? 俺は正面の木製扉に目をやった。お袋も同じ方向を見た。

扉が開く。姿を現したのは——あのオールバック野郎だ!

「おいコラ、てめえ!」

俺は怒鳴った。オールバックが俺を横目で見る。何か言い返してくるかな、って思ったけど、何も言っただな。野郎の用事があるのは、お袋にか。

っつーか、なんでお袋とオールバックが話をしてるんだ!  
!?

二人の会話が聞こえた。

「メイコの選んだ者達だが、なかなかよく働いてくれる」

「当然よ。あたしと寝たんですもの。コウスケには絶対  
言えないし、あたしを裏切ることもできない」

「そうだな」

誰のことを言ってるんだ？

オールバックが俺を一瞥してきた。

「それと昨日も言ったが、まだ殺すなよ？」

「わかってるわ」

「あんな無能でも、一つくらいは役に立つからな」

「そうね。あの男を苦しめるために……」

お袋が笑う。と、ええええええええ!! なんな何してやがる、

お袋! なんでオールバックとキスしてんだよ!?

くそお! わけがわからねえ! お袋とオールバックで

つるんでんのか!? 何なんだよ!? 畜生っ。

「どうしたのかね? ハガネ君」

オールバックが俺のほうに顔を向けた。何が「どうした

のかね」だ! わかってんのに知らねーフリすんな!

「無知なきみが驚くのは当然だ。気にしなくてもいい」

「ふざけんな!」

野郎。嘲てくれやがってよ。頭の血が沸騰しそうだけ。

イカってる俺に背を向け、野郎が部屋から出て行った。

「偉そうな男」

打って変わったお袋の声。見ると、お袋の顔には怒色が浮かんでいた。

「誰のおかげで、ライバル会社を潰せると思ってるのかしら。まあ、あの嫌味な顔も、もうすぐ見ないで済むようになるけど」

お袋が苦々しく呟いた。

俺、ここまで人の汚い面を見たのは初めてだ。みんなで騙し合ってるなんて……。これじゃ、人を信用できなくなるじゃねえか。なあ？

くそつ。視界がぼやけてきやがった。血が出過ぎてるんだ。——俺、死ぬのかな？ 笠岡、コジユウタ……。

——パシユツ。

風を抜いたような音が、俺の耳に届いた。

続いて聞こえたのは——重い音。人が倒れたような……。そんな音だ。

「坊ちゃん」

誰だ？

「坊ちゃん」

誰なんだ？

「しつかりしてください」

……コジユウタ？

「遅くなりやした。もう少しの辛抱です」

——パシユツ、パシユツ。

俺の腕が自由になった。でも、体に力が入らねえ。倒れそうになった——けど、誰かが俺を支えてくれた。

「お気を確かに」

コジユウタの声がする。

気を確かに、って言われても……俺、もう限界だ。意識、保ってられねえよ……。

5

見慣れた天井。俺の部屋だ。俺、ここで寝続けて、もう何日になるんだ？

お袋の別荘で助けられてからずっと、外の情報は、窓から見える景色とコジユウタの報告だけ。笠岡のこととか知りたいのに、コジユウタの野郎、「諜報員が調べています」の一点張りだ。マジで調べてる最中なのかも知んねーけど、早く知りてえよ。こんな怪我さえしてなけりゃ、自分で調べに行くのに……。

——にしても、やけに静かだよな。いろいろあったんだから、もうちょつと騒々しくてもいいくらいだぜ？ なんたって、お袋……もう死んじまったけど、お袋が他社とつるんで、ここを潰そうとしてたんだからさ。他にも内通者が数名いて、医務室の室長と警備部の部長も、そのうちの一人だ——って話じゃねーか。

つと、ん？ 誰かがノックしたぞ。コジュウタかな？

「どうぞ」

俺が言うと、扉が開いてコジュウタが入ってきた。

「笠岡のことで何かわかったことは？」

早速、俺は訊ねた。コジュウタが、そばで立ち止まる。

コジュウタの目は俺に向いていた。

「坊ちゃん、なぜそこまで笠岡ミサのことを気になさるんですか」

なぜって……んなこと訊かれても……。

「わかんねえけど、気になるんだ」

これ、正直な気持ちだぜ。ホントにわかんねーんだ。ただなんとなく、笠岡を放っておいちゃいけねーような気がするんだよ。

コジュウタがため息をついた。つつーでも、ホント小さなため息だけだな。

「あつしにお任せください——と申したところで、坊ちゃん聞きやせんね」

「ああ」

「坊ちゃんが爆弾を設置したこと……」

コジュウタの発言に、俺は目を見開いた。だって、今、爆弾のこと言ったんだぜ？

「知ってたのか!？」

コジュウタに問う。コジュウタが頷いた。

「坊ちゃん、爆弾の扱いが上手でやすな。あつしでも外すのに手間がかかりやした。それに、時間内にはずせたのは最上階の物だけでしたぜ」

「コ、コジユウタ。お前、そこまで知ってて、どうして親父に——」

「社長に報告すれば、坊ちゃんもただでは済みやせん」  
確かに、そうだ。いくら俺だって、社内に爆弾設置したことがバレりゃ、殺されかねえ。俺の身を案じて、コジユウタの野郎、黙っててくれたのか。

「坊ちゃん」

コジユウタが床に片膝をついた。

「このことは一切喋りやせん。坊ちゃんのことも姐さんのことも、あつしがうまく社長に伝えやした。が、自分でまいた種は自分で摘み取る、つてのが、あつしらの決まりです」

自分で……摘み取る。

「あつしが手伝いやす」

力強い言葉だ。

「笠岡ミサを取り戻しやしよう」

え？

「医務室長に吐かせたところ——」

コジユウタが立ち上がった。

「笠岡ミサは洗脳されていたらしいです」

洗脳!?

「監禁室に毒ガスが撒かれた一件も、洗脳するための一過程だったようですな。医務室に移した後、室長が笠岡ミサに洗脳を施した、と」

「コジユウタツ」

俺は上体を起こした。かなりつらかったけど、無理矢理起こした。コジユウタを見る。コジユウタも俺を見てきた。

俺の心は決まっていた。

「まいた種を……摘み取りに行こう」

## 第六話

1

誰がこんなこと予測しただろう。

俺はどうすればいいんだ？

捜しに行けばいいのか？

誰よりも早く。誰よりも先に……。

お前がそれを望むなら、俺は死んでも捜してやる。必ず

見つけてやる。だから……

だから。

無事でいてくれよ。

笠岡の異動、失踪の知らせを聞いてからふた月。俺は何もできないでいた。

自分でまいた種を摘み取るって、そう心に決めたのにさ。まったく、出鼻をくじかれて。なんだってんだよ。俺は何してるんだよ。早く捜しに行きてえのに、こんなところに監禁されて、情けねえ。ほんとに情けねえよ。

俺はベッドの上で仰向けになりながら、泣きたい気持ちをため息で紛らわせた。

笠岡が行方不明になったって聞いたとき、息が止まりそ

うになるくらい驚いた。うちの潜入捜査員から入った情報で、失踪場所はドイツのバイエルン。俺の知らねえ間に、笠岡はバイエルンにある敵支社に配属を変えられてたんだ。理由はわからねえ。多分コジュウタは知ってるんだろうけど……。で、そこに到着して間もなく、笠岡は姿を消したらしい。

「なんでなんだ」

俺は憎めない部屋で問いかける。当然、誰も答えちゃくれねえ。

俺は憎らしい扉を見た。あのドアには鍵がちやつかりかかっている。俺が笠岡を捜しに行かねえように、な。

なんでこんなボンクラ息子を縛りつけるんだよ。ろくに人を殺せねえ、役立たずの暗殺者をよ。親心か？ そんなんじゃないだろ。親父のどこに親心があるってんだ。俺を育ててくれたのはコジュウタだけ。

鬱陶しい。親父も会社も、あの憎々しい敵社も。俺を自由にしてくれ。俺の好きにさせてくれよ。

……まあ、自分だっけわかってるさ。俺一人の力じゃどうしようもねえってことくらい。今の俺は、誰から見たって非力だろうな。

だからって、こんなことしてたんじゃいつまで経っても非力のままだぜ？ かわいい子には旅をさせろって格言、知らねえのか？ ……ああ、かわいくねえんだっけ。

「ん？」

ノックの音が聞こえたような気がする。

どうやら空耳じゃなかったみたいだ。鍵の開く音がして、扉が開いた。姿を現したのは予想通り、コジュウタだ。

「坊ちゃん」

俺の枕元まで来て、コジュウタが絨毯に膝をついた。囁いてくる。

「社長が毒を盛られやした」

なんだって!?

まるで親じゃねえ親でも、びびらずにはいられなかった。そりゃ、恨みなんてごまんと買ってる親父だから、毒盛られても不思議じゃねえけどよ。毒味はいつもされてるはずなのに……。

「今、医療部で再生治療を行ってやす。あっしはこれからすることがあるんで、しばらくの間……長ければ数週間ほどこつちに来れやせん。鍵開けときますが、くれぐれも無謀なことはなさりませんように」

コジュウタが立ち上がり、早足で部屋を去ろうとする。

俺は慌てて起き上がった。

「コジュウタ！」

コジュウタが立ち止まった。俺のほうに振り返る。

嫌な親でも、やっぱり気になるんだ。

「親父は死んだのか？」

俺は真っ直ぐにコジユウタを見つめた。俺、どんな表情  
ぢてるだろう。

「覚悟はしておいてくださいませ」

愕然とする俺を置いて、コジユウタは部屋を出ていった。

俺はエレベーターを降りた。ここは地下一階。医療部の  
あるフロアだ。

再生治療って言ってたっけ。ということは、親父はもう  
死んでるのか。

オペ室の前まできて、立ち止まる。「手術中」の印が点  
灯されてる。この中に親父はいるんだな。

俺は扉の向かいにある壁に、もたれかかった。

特に何をするわけでもなく、時が過ぎる。いつからか俺  
はその場に座り込んでいた。

「まだ終わらねえのか」

ぼやく。扉の上側にある文字は、まだ点灯してる。長え  
なあ……。

ふと、誰かが近づいてくる気配がした。左からだ。振り  
向くと、口髭があつてダンディな禿頭のおっさんが見えた。  
こいつ、知ってるよ。幹部の加山だ。

俺のそばまで来ると、加山は立ち止まった。

「こんなところで何をしなすってるんですか？」

「見ての通りだよ」

「社長のオペが終わるのを待っていらっしやるんですか」

「それは違う」

俺は立ち上がった。

「別に待っちゃいねえ。なんとなく来て、なんとなくいるだけだ」

ただそれだけだ。そうに違いねえ。

「それより、お前こそなんでこんなところにいるんだよ」

「わたしは社長の様態を伺いに来たんです」

「幹部自らが、ご足労なこったな。まだオペは終わってないぜ」

「そのようすな」

加山がオペ室のほうに顔を向けた。

なんで幹部が一人で様子見なんかに来るんだ？ 不思議

だ……もしかして、まだ一般社員には知られてないのか？

「加山」

俺に呼ばれて、加山がこっちに向きを戻した。

「このこと、社員はみんな知ってるのか？」

「いいえ。ですが、感づいている者もいるでしょうな。」

明日までには噂が広まっています。坊ちゃんも、このことは他言なさりませぬよう」

「わかった」

「では、わたしはこれで……」

一礼し、加山がきびすを返した。来た道に戻っていく。

俺はオベ室に再び目をやり、ため息をついた。

人の死なんて呆気ないものだ。どんな野郎でも、暗殺団の総帥でも、死ぬときや死ぬんだからな。

親父が死んでからまだ三日も経ってねえつてのに、社内には次社長の話がはびこってやがる。候補は副社長のコジユウタ、専務の江藤、この二人だ。俺は入ってねえ。ま、当然だよな。俺なんか社長にした日にや、会社潰れるもんな。人材第一だった親父の会社だし、相応しい実力の持ち主が社長になるべきだ。

でもそれで不安があると言えば、俺の居場所か。コジユウタが社長になればともかく、他の奴だったら……ねえだろーな。俺の場所なんて。

つつーわけで、社内なんかにとんでもいられる雰囲気じゃなくて、俺は海岸までバイクを飛ばした。見るに耐えねえくらい汚い東京湾だけど、あの会社にいるよりは遥かにましだ。

コンクリートで固められた海岸に座り、何気なく海を眺める。潮風が生ぬるい。

——ガッ ドドドドドドド

聞き慣れた音が、突然背後から聞こえた。エンジンをか

ける音、だよな？

——グオンッ

アクセルを吹かす音……か？

って、

「まさか！」

すげえ勢いで振り返った俺の目に、俺の愛車に跨る誰かの背が見えた。

「おい、てめえ！」

怒鳴りつつ立って駆け出す。けど、相手のほうが少し早かった。アクセル踏んで行っちゃまいやがった！

バイク盗られるなんて、もう泣きつ面に蜂だぜ。懸命に追いかけたけど、人の足が追いつくはずはねえんだよ。

「畜生！」

次第に、俺は足を止めた。つつーか、疲れ果てて足が止まった。

くそっ。いきなり全速力で走ったもんだから、息があがってる。全身汗だくだぜ。

「あの野郎、見つけたらただじゃおかねえ」

ぼやきながら、俺は周りを見回した。無我夢中で追いかける間に、なんか、来たことのねえ廃屋街に入っちゃまったみてえだ。

歩きながら周囲を見る。なにせ、知らねえ廃屋街だからな。何番街かわからねえことには、自分の位置が把握でき

ねえ。

「うつ」

突然、俺の視界が目映い光で染まった。反射的に目を瞑る。

眩しいのは一瞬だったみたいで、目を開けても、今度はどうということもない……と思っていたら、また一瞬、光が視界をかすめた。なんだ？ 誰かがライトでも当ててきてんのか？ ガキのいたずらみてーなことしやがる。

すぐに光の発信源を見つけることができた。この、俺の真横にある廢ビルの三階だ。

ビルの中に入って、俺はジャケットの裏に隠してある拳銃を抜いた。ただでさえむかついているところに余計なことしてきやがったんだ。誰だか知らねえが許さねえ！

二階。オフィスに使われてたみてえだな。ぼろぼろで埃まみれの机と椅子が、ごろごろと転がってる。

この上だ。慎重に階段を上がった。踊り場で一度止まって、耳を澄ます。さあ、突入す――

「おい」

「うわあー！」

俺は動転した。誰かに背後から肩を捕まれたんだぜ！

もう自分の意志でどうのこうのじゃねえ。考えるより先に振り返り、敵に銃口を向けようとして……

「やめろって」

どっかのオヤジの声がして、俺は腕を捕まれた。もちろん足搔いたけどさ。こいつ、なんて力だ。びくともしねえ。

「おいおい、俺の顔を見忘れたのか？」

呆れ口調で、オヤジ。俺はまじまじとオヤジの顔を凝視した。

この顔、どっかで見た覚えが……って、あああ！ こいつ、あのときの謎のオヤジ！

「思い出したみてえだな」

にやり、とオヤジが不敵に笑った。

なんでだ!?　なんでこんなとこにこの野郎がいるんだ!?

「再会の喜びに浸るのは後だ。つべこべ言わねえでついでこい」

「誰が浸るんだ、誰が！……って、おい、どこ行くんだよ!？」

オヤジの勝手な発言に文句を言いながらも、俺はあとについて階段を上がった。よく見りやこの背中、俺のバイクをかつぱらいやがった野郎と同じじゃねえか。

「何なんだよ、一体」

三階で立ち止まったオヤジに、俺は早速苦情をぶつけてやった。

オヤジが俺を見て、またも不敵に笑う。そして、人差し指でどこか差した。俺はその指の先を視線でたどって……

硬直した。

自分の目を疑った。夢なんじゃねえかと思った。割れて半分なくなったガラス窓の前に……

「笠岡」

そう、笠岡ミサがいた。

「久しぶりね、樫川さん」

笠岡が微笑んでる。俺は嬉しくて、でもまだ信じられなくて、どうしようもできないでいた。

「驚きすぎて動けないみたいね」

そう言うって、笠岡が楽しそうに笑う。でも、その目には

——目には涙が浮かんで見えた。

我に返ると俺は、笠岡を抱きしめてる自分に気づいた。

うわ、なんて大胆なんだ、俺！ 誰か何とかしてくれ！

「ごめんなさい」

ぽつりと笠岡が呟いた。なんで謝るんだ？

「わたしのせいであなただを危険にさらしてしまった……」

本当にごめんなさい」

「笠岡は何も悪くない！」

俺は即座に叫んだ。

「笠岡は何も悪くない。むしろ俺の命の恩人だ。俺の……」

「……」

大切な人だ。

最後まで口で言えたら立派なんだけどな。こんなときで

も恥ずかしさが先行しちまう。ったく、情けねえぜ、俺って奴は。

それはともかく。一流の暗殺者でも、やっぱり女の子だな。なんか、抱き心地がいつつーか。こう、放したくねえつつーか。このまま時が止まっても惜しくねえな。いやむしろ、止まって欲しいような……。笠岡とこうしてると、なんだか心が安らぐ。

「……あー」

史上最大と言っていていくらい邪魔な声が聞こえた。あのオヤジー！

「ガキのくせにいつちよ前なこと言うなー、つてのは置いといて。時間が惜しいんだ。いちやいちやの続きは後にしようや」

俺は恨めしい目を一度オヤジに向け、笠岡から身を離れた。

「ボウズはいろいろ疑問はあるだろうが、全部後回しだ。二人とも、俺についてこい」

「ンだよ、えらそーに」

「行きましょ」

笠岡が見上げてくる。

愚痴愚痴な気分満タンだったけど、笠岡が行くんじゃしようにねえ。俺もおとなしくオヤジについて行くか。

『バイク捨てろってのか!？』

『当たり前だろう。ボウズのバイクと列んで走るなんて、目印つけて走るようなもんだ』

『でも、このバイクは俺の愛車で……』

『嬢ちゃんとバイクとどっちが大切なんだ？ ええ?』

『なんでそうなんだよ!？』

『つべこべ言わねえで、さっさと乗れ!』

——といったオヤジとのやりとりの後、俺はオヤジの車の後部座席にいた。横には笠岡がいる。運転してるのは、言うまでもなくオヤジだ。

ちくしょー、俺の愛車が……まあ、笠岡のためだもんな諦めるしかねえよな。

「どこ行くんだよ?」

オヤジに向かって訊く。振り返らずにオヤジが答えた。

「成田空港だ」

「成田!？」

何しに行くんだよ、そんなところに。

「上海に飛ぶ。そっからは陸路で移動だ」

「おい！ 勝手に乗るなよ、飛行機なんて！ 大体、俺、

パスポート持ってねえぞ。今！」

ん？ オヤジが左手を挙げた。何か黒くて薄い手帳みた

いなのと、四つ折りの紙を持つてる。なんだ？

「見てみな」

オヤジに言われて、俺は手帳と紙を受け取った。

まず手帳を開く。俺のパスポートだ。偽造じゃねえ。なんでこいつが俺のパスポート持つてるんだ？

次に、紙を開く。字が横書きで書かれていた。見覚えのある字体だ。コジユウタか？ とりあえず読んでみよう。

「これを読んでる頃には、空港でしょうか。日本を発つた後かもしれませんな。」

突然のことに驚いていらっしやることでしようが、安心してください。坊ちゃんを迎えに来た伊月セイゴは私の戦友で、信頼できる男です。バイエルンに異動した笠岡ミサの奪取も、私が伊月に委嘱しました。情報の漏洩を防ぐため坊ちゃんに黙っていたこと、お詫び申し上げます。

自分で芽を摘むことはできずに終わりましたが、坊ちゃんにはまだ残っています。坊ちゃんは強くならねばなりません。そのためには、社の外界で鍛えるのが一番です。伊月についていってください。絶対悪いようにはなりません。

私は今後も社に尽くしていくつもりです。これからは、坊ちゃんが危機に直面しても駆けつけることができないでしょう。

坊ちゃん、立派になってください。

有嶋コジユウタ」

……なんてこった。なんでこういうことになってんだ？  
どうしてコジユウタ、こんな手紙を……。

「事情は呑み込めたか？　そういうわけだ。よろしくな、  
ボウズ」

オヤジの声。

って、何がよろしくだ。勝手に決めんじゃねえ！

「今すぐ引き返せ！　コジユウタに文句言ってるやる！」  
苛立ち任せに怒鳴る。こんな重大なこと勝手に決めるな  
んて、俺は許さねえぞ。

「なに寝ぼけたこと抜かしてやがる」

冷淡にオヤジが言った。どこが寝ぼけてるっつーんだ、

この野郎！

「戻ったところで、今のてめえに居場所はあるのか？」

場所？

「知ってるんだぜ。てめえの親父が死んだこと」

「でもコジユウタが社長になれば、俺の居場所なんてい  
くらでも……」

「甘ったれんな。いつまでも有嶋に頼ってんじゃねえぞ。  
ちっこいガキじゃあるめえし」

なんだと!?

「有嶋がどれだけ苦勞してるか、てめえは知ってるか？  
普通なら、ボウズみてえなガキに構ってられねえくらい忙  
しいんだぜ。あいつは世話焼きだから、ボウズの面倒も  
ちやつかり見てたけどよ」

……。

「ボウズは、自立したいと思わねえのか？　いつまでも  
人の世話になって生きる気か？」

そんな、

「そんな気はさらさらねえ」

誰かに依存しつぱなしの人生なんて、んな情けねえこと  
したくねえよ。

「だったら、有嶋が与えてくれた自立への道、しっかり  
歩めや。遅しくなって、それでもまだ奴に文句があったら、  
そのときぶん殴りに行けばいいんだからよ」

俺は黙ってた。オヤジは、俺の言葉を待ってるみたいだ。  
笠岡も何も言わない。

甘えか。

俺の場所があるなんて、甘い考えか。

確かに、俺はずっとコジュウタに頼りつぱなしだったか  
もしれねえ。自分で立ってるつもりだったけど、ずっとコ  
ジュウタに支えられてたのかもな。俺の力なんて貧弱だし、  
今思うと、依頼の一つも独りでこなせなかった。コジュウ

タと笠岡に、今まで助けられてたんだ……。

——そうか。かわいい子には旅をさせる、だよな。わかつたよ、コジユウタ。

「必ず強くなって、コジユウタの野郎、一発食らわせてやるっ」

俺は意を決した。オヤジの豪快な笑いが車内に響く。

「ああ、その意気だ！　だが、生半可なパンチじゃよけられるぞ。有嶋と並ぶかそれ以上にならなきゃな」

あん？　この野郎、

「難しいこと言ってくれやがるぜ」

「大丈夫だ。俺がしごいてやる」

バックミラーに映るオヤジの目が笑ってる。

まったく。こんな野郎と一緒にいるのか。先が思いやられるぜ。ほんとに。

俺は笠岡のほうを見た。笠岡も俺を見返してくる。見つめ合って、互いに微笑んだ。

ああ。コジユウタを殴れるくらい……笠岡を守るくらい……絶対、強くなってやるぜ！

「そう言えば笠岡、洗脳されてたんじやなかったっけ？」

「ええ」

「いつ解けたんだ？」

「社長の車で社に戻る途中。榎川さんは麻酔銃で眠らされてたから、知らないわよね」

「あー、そのときか」

「実はあのとき、暴走族と出くわしてね。一台のバイクが車と接触しそうになったの。向こうが慌ててハンドル切つて、当たらずに済んだんだけど。その姿が以前見たものによく似てたのよ」

「以前？」

「うん、そう。以前……榎川さんと初めて出会ったときに、ね」